

41499

教科書文庫

4
810
41-1918
200030 1530

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

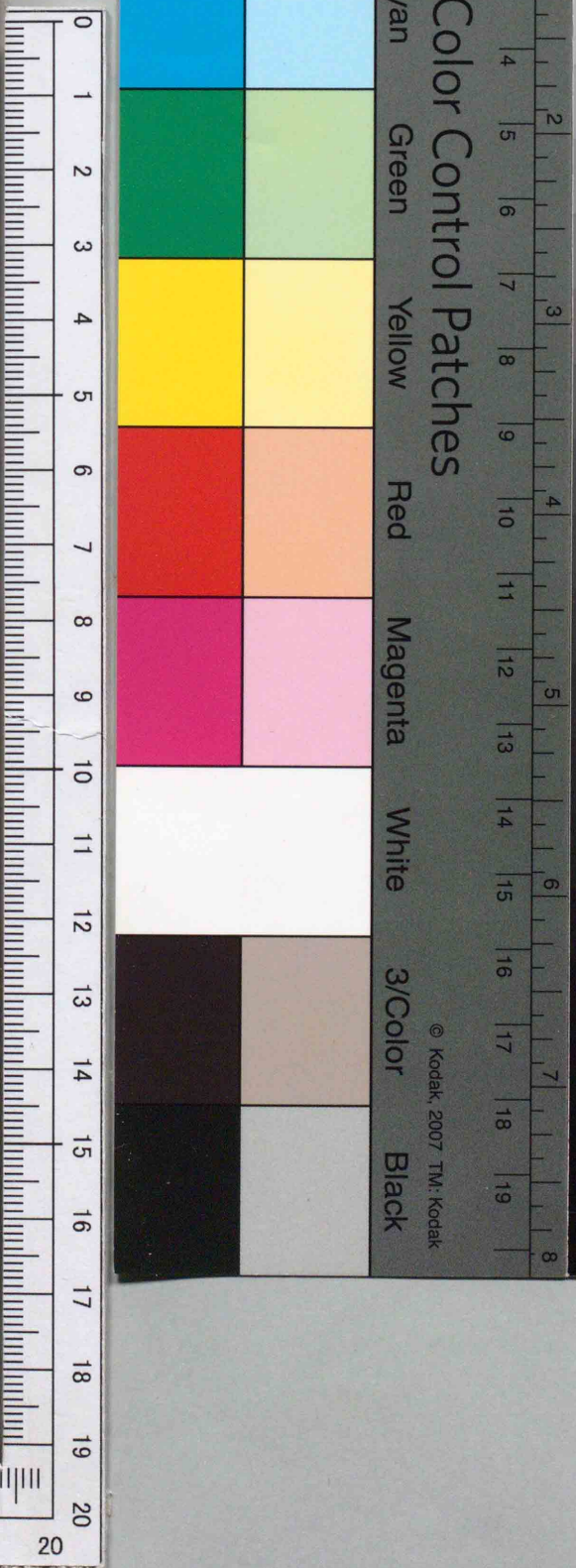


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Sa19
資料室

訂修新撰國語讀本

佐々政二編 卷一

資料室
日六十月一年七正大
濟定檢省部文
用科語國校學中

375.9
Salp.

文學博士佐々政一編

訂修
新撰
國語讀本



株式會社
明治書院



訂修
新撰國語讀本卷一目次

一	日本帝國……………	一
二	國花……………	五
三	春のあした……………	一〇
四	文を學ばんとする人に……………	一二
五	都の友に……………	一五
六	千本松原上……………	一八
七	千本松原下……………	二四
八	旅行の心得……………	三〇

目次

九	櫻井の里	三四
一〇	競馬	三八
一一	日本海の家戦上	四六
一二	日本海の家戦中	五〇
一三	日本海の家戦下	五七
一四	湖山長者	六四
一五	賭け碁	七一
一六	動物の保護色上	七六
一七	動物の保護色下	八一
一八	征衣上途	八五
一九	國民の義務	九一

一	兵役	九一
二	納税	九五
二〇	座右の銘	九八
二一	一燈錢	一〇一
二二	吾輩は猫である	一〇四
二三	四季の月	一一一
二四	我が故郷	一一三
二五	リンカーンの少年時代上	一一九
二六	リンカーンの少年時代下	一二六
二七	須磨の浦	一三一
二八	須磨の嵐	一三七

二九 大海原……………一四〇

三〇 海に歸れ……………一四三

三一 國引……………一四九

三二 膽力の養成……………一五二

三三 スミス氏の飛行……………一五九

三四 冒險小僮……………一六五

修訂新撰國語讀本卷一目次終



修訂新撰國語讀本卷一

一 日本帝國

日本帝國は、北、樺太より、南、臺灣に至るまで、千二百餘里に連互せり。随つて寒暑の稍甚しき地もなきに、はあらねど、概して温帶中和の氣候にて、春夏の候に氷に閉さるる村もなく、秋冬の節に汗に苦しむ町もなし。春の花、秋の紅葉はさらなり、驟雨一過しては月光洗ふが如く、積雪晴來つては一望の銀世界、四季と

りどりの眺は、窓の内ながらも、絶えずこれを見ることを得るなり。

假に新附の朝鮮半島をさし措けば、日本全土は皆島國にして、南北に比すれば、東西の幅員頗る狭し。最も廣き所にて、日本海の海岸より太平洋の波打際まで五十里を出でず、山奥の肴屋にも新鮮なる魚蝦を得べく、海邊の八百屋にも今朝採りし松茸を見るべし。況やその山川は頗る秀麗、その國土は頗る豊饒、天恵に富めることは、世界のいづれの國に比しても、決して劣るところあらざるなり。

されば國民はこの美しく豊かなる風土に化せられて、自ら淳良なる風俗をなせり。親はこの豊かなる海山の産物をその子とともに味はんとし、子はこの美しき花・紅葉を父母とともに眺めんとす。親の慈愛も、子の孝行も、兄弟夫婦の情愛も、自らその間に養はれて、一家の睦まじきこと、これ亦全世界に比類を見ざるなり。

この睦まじき家より出でたる弟妹が新しき家を立つるや、その新しき別家の人人は、兄の家を本家として、これに敬事し、本家の人人は、又別家の人人を子

弟として、これを愛撫す。別家より更に別家を出し、その支流漸く廣くして日本全國に及びたるものを我が日本國民とす。

畏くも萬世一系の帝室は、日本全國民の總本家にして、全國千萬の家、相寄り相集まりて、これを敬重し、これに奉仕するもの、即ち我が國家なり。皇室の我等臣民に臨み給ふこと、恰も慈親の赤子に於けるが如く、我等臣民の皇室を慕ひ奉ることも、亦孝子の父母に對するが如きものあるは、畢竟これが爲なり。嗚呼、この帝國に生れ、この皇室を戴ける我等臣民は、實に

世界の最も幸福なるものと云ふべきなり。

二 國 花

我が日本の國花として世界に誇るに足るものは櫻であらう。今、支那で櫻桃といふのが櫻に相當するといふことであるが、それも日本の花の美しさには及ばないとのこと。西洋のチェリー*Cherryも實は大きい。が、花の色は薄い。爛漫と咲亂れた櫻花の、山を埋め、谷に満ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は、日本特有の美景である。

* Cherry.

支那の國花は牡丹である。その濃艶な粧は美しいに相違ないが、あつさりとした日本趣味には適しない。香氣鼻を衝く薔薇の色も棄てがたく、美しいものであるが、これも艶冶の態があつて、清楚人を動かす野趣に乏しい。しかし薔薇は歐米人の花の王と稱するものである。

日本の櫻はその色は極めてあつさりとして居る。但し純白では無い、いはゆる櫻色である。その瓣は極めて薄い。一樹に無數の花を着けて、咲く時は一時に、爛漫と、残なく咲く。上品な大宮人の風もあり、楚楚た

(一) 櫻散る木の下風は寒からて、空に知られぬ雪ぞふりける。(拾遺集、紀貫之)
(二) 日本書紀允恭天皇の條に、「花はし櫻のめて、云云」の歌あり。

る野趣をも帯びて居る。空青く、水清き日本の氣色には最もよく釣合つて、深山都市どこにあつても皆宜しい。甘日草の長い盛りもなく、薔薇の花の高い香氣も無いが、兔に角見事である。その散つて「空」に知られぬ雪と降つては、一段の風趣があつて、殆ど言語に絶してゐる。日本の花の中の花は櫻である。古く「花ぐはし櫻」と歌はれたのは、蓋しこれがためである。

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく、暑くもない日和を花曇といふ。夜は照りもせず、曇りもせぬ朧月夜、雲

賀茂真淵の歌。

霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。春の特色は、どこまでも、駘蕩といふ點にあり、溫和な所もあり、峻嚴猛烈といふ心の微塵も無い所にある。櫻はこの時候に孕まれて咲出づる花である。きは立つた

名可花

よきふしをまじりて
しづかに咲きぬる花
はなはたしき花

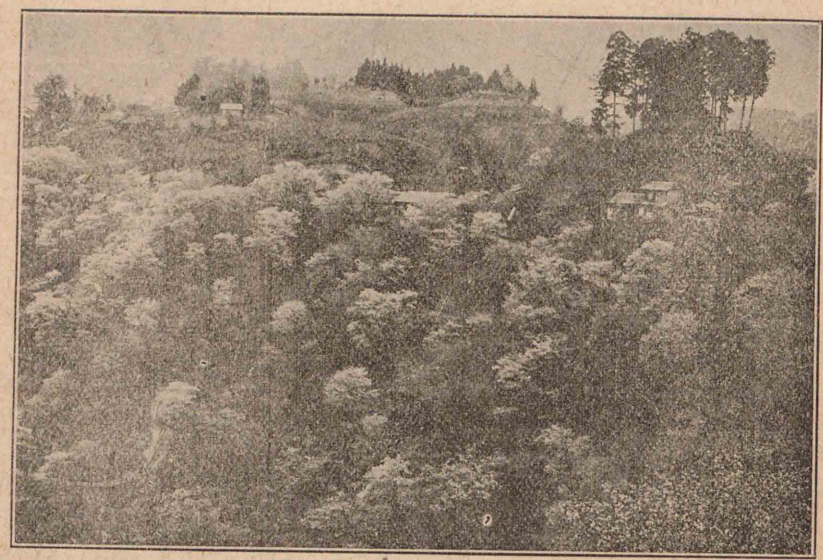
蹟筆紀知田八

特色の無い所が即ちその特色である。うらうらと長閑けき春の心より匂ひ出でたる山櫻花」といふ歌などが、最もよくその特色をあらはしてゐる。

八田知紀の歌。

松尾芭蕉の發句。

鐘一つ賣れぬ日はなし、江戸の春。(榎本其角)



吉野山一日千本

「吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限は櫻なりけり。」これは満山、櫻に包まれた吉野山の景色を詠んだのである。「花の雲、鐘は上野か、淺草か。」これは「鐘一つ賣れぬ日も無き」大都會の花に掩はれた光景である。櫻は牡丹、薔薇のやうな、花瓣を

賞翫する花では無くして、木として賞翫する花である。否、多くの木を集めて、人は唯花中に在つて賞翫する花である。上から下を見て愛でる花では無くして、下から眺めて愛でる花である。春風四月、日本人は暫し花の世界の人となるのである。(芳賀矢一—雪月花)

三 春のあした

紫にほふ山のはの
雲より夜のあけゆけば、
柳のつつみ星消えて、

野寺の鐘の音すなり。

みあかし残るうぶすなの
森の櫻の見えそめて、
鴉むれゆく松原の
末よりのぼる薄煙。

水ゆたかなる川ぞひの
麥生の霞やや晴れて、
朝立いそぐ旅人の

小笠の上に雲雀啼く。(尾上柴舟)

四 文を學ばんとする人に

この間お送りになりし美文三篇、卑見を加へて御返し申候間、御一覽の上、御不審のかどもあらば、御尋ね下され度候。こんどは、「都の友に」、「郷里の友に」、「旅中より友に」の三題にて、書翰文を作られんことを希望いたし候。それについて、聊か小生の意見を申上げん。

この頃の青年にて、文學の嗜好あるものは、短

歌を作るもあり、新體詩をつくるもあり、小説をつくるもあれど、書翰文を上手にかくものは、至つて少なきやうに見受け申候。文章の必要なることは、今更申すまでもなく候へども、その文章の中にて、最も必要にして、何人も稽古せざるべからざるものは書翰文に候。然るに議論文は書けても書翰文が書けず、美文は出来ても書翰文が出来ざるやうにては、文を學びたる甲斐なきことかと存ぜられ候。

元來、書翰は意を達するのみにてはすみ申さ

ず、禮を失はぬに始まりて、人を動かすに終る事
と存じ申候。中學を卒業したる人達ならば、意の
達せぬ事はなけれど、失禮になることを言ひた
り、失禮にならずとも、感情を悪くするやうなこ
とを言ひたり、意は通じても、かゆい處へ手のと
どかぬやうな言ひ方をしたりして、人を動かす
どころではなく、人を面白がらせる事も出来ぬ
人が多きやうに候。これ、畢竟するに、平生、美文な
どは作つても、書翰を練習せざる故に候。これ、先
づ第一に、書翰文に熟達せられんことを希望い

たし候所以に候。(大町桂月)

五 都の友に

拜啓。その後御起居如何に候や。昨秋一家擧つ
てこの地に移り候ひてより、往來する友もなく、
日日一里の道を學校に通ふのみにて候ひしが、
この頃の春の景色に、おのづから心も浮立ち候
へば、學校の休日毎に、弟妹と共に田野の間を歩
き廻り、例の水彩畫をも試み候。そのうち最近の
もの一枚、ここに説明をも添へて御送り申上候。

小川の傍に高き松の聳えたる、その下の藁屋が僕等の住居に御座候。土橋の上に立ちたるは弟と妹とに候。川の隄に様様の色うるはしきは、若草の中に堇花・蒲公英・蓮華草などの咲亂れたるにて、その中には土筆も多く、妹などは、時時前垂に一杯にして歸り候。隄のあなたに緑の色濃きは麥畠にて、まだ穂は出でず。菜の花は咲満ちて、舞ひをる蝶を招きをり候。

すかし見れば、野も山も一面に、火鉢の上に火氣の昇るが如く、ちらちらとももの動き候。これ

は陽炎といふ由、晝にはかけ申さず候。雲雀も晝中には入らず、青天に一點の塵と見ゆるほど小さく、聲ばかり大きなるが、やがてふつと啼止みて、逆落しに麥畠のうちに落ち候。山陰の藪には、今も鶯の囀りをり候。この邊にては、夏の頃までも、かやりに啼續くるよしに御座候。

この度はこれにて筆を止め候。都の友の消息もゆかしく、(三)上野日比谷(三)の春色も思ひやられ候。御近況御知らせ下され度候。草草。(藤岡東圃)

(三)東京市内の有名な公園。

*駿河國駿東郡にあり。

六 千本松原上

沼津^{*}の町の細い横丁を二曲り三曲りして、昔の東海道通へ出た。右へ少し行つて町を出てしまふと、小さな川がある。子持川とか云ふさうだ。土橋を渡ると、左側の萱葺屋根の家から、筒袖を着て下駄をはいた、五十位のふとつた男が出てきて、「今、馬車が出ますが、如何ですか」と云ふ。「いや、わしは千本松原へ散歩に來たのだが、首塚といふのはどの邊か」と問うた。するとその男は丁寧^{*}に腰をかがめて、「さうで御座いますか。御首様は、この川のふちを真直に松原へ這入れれば、す

ぐ解ります」といつた。その音聲から態度まで、如何にも善良な人らしく思はれた。苟且^{かゝ}の事をがら、予は頗る愉快を感じた。

千本松原はすぐ眼の前に横はつてゐる。幾萬本あるか分らぬ程の松が、背くらべをして、雲を突いてゐる。天氣が曇つてきて雨模様であるから、松の梢が雲に届いてゐるやうだ。のそのそ歩いてゆくと間もなく松原で、林中の砂原に杉丸太の小さな鳥居がある。八尺許の石碑が立つてゐる。表に首級冢碑と記し、明治三十三年に髑髏百餘茲に露出したのを、同三十五

*二四〇。

年五月、土地の人相謀り、石を立ててこれを弔うたと書いてある。天正八年、武田勝頼が北條氏政とこの地に戦つた時、首級を茲に埋めたのであらうとの事である。今は日露戦争の最中だが、これが百年たち、二百年たち、三百年たつ間に、雨に潰え、風に損はれて、幾萬の髑髏が滿洲の野に露出する様な事はないであらうか。もし又さういふ事のあつた時は、この地の人の如き優しい心がけの人があつて、石を立てて厚く弔つてくれるやうな事があらうか。思へばこの百髑髏などは幸福と云はねばならぬ。閑雅清淨な地に祭ら

れて、土地の人人には「お首様、お首様」と崇められて居る。古來戦場の露と消えた人は數かぎりなくあるが、三百年はおろか、二百年はおろか、百年の後にも、その跡の認め得らるるものが幾許あるであらうか。

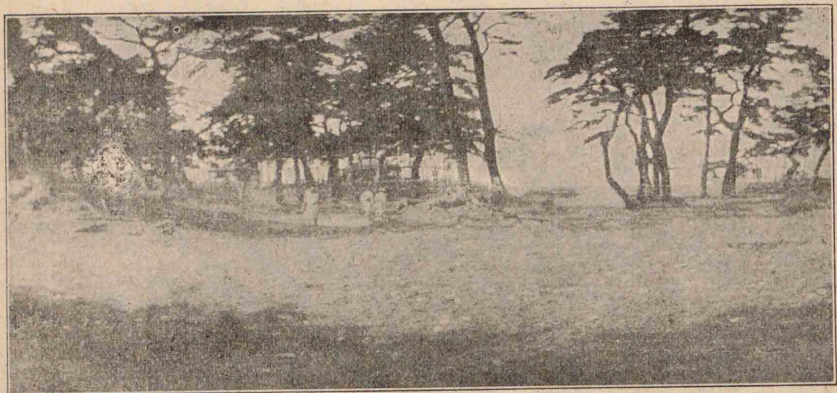
松原の中へ這入つてみると、外から見たよりも一層立派な松原である。三かかへもある古木が相競うて、十丈以上に高く立つて居る。その壯快な趣は何とも形容が出来ない。根上りの松も、庭の植木や盆栽の不自然なのは極めて厭味なものであるが、風が砂を吹きさらつて、自然に根上りとなつたのは頗る趣が

播磨國明石郡垂水村の海濱。

伊豆國田方郡に在り。
駿河國安倍郡に在り。

ある。巨大な幹や、繁りしげつた枝や葉を、しつかりと支へてゐる根張の力が十分その形に顯れてゐる。實に見る眼も氣持がよい。この高大な壯快な趣は、到底舞子などの及ぶ所ではない。

松原を出ると、芝原に明屋らしい家が一軒ある。その前を通つて波打際へ降りて見る。海は極めて穏かで、伊豆の眞城山・大瀬の崎など手にとる様に見える。西の方、久能山・三保など薄黒い雲のやうである。のたりのたりと波がよせる。潮水は透明で、底の砂利が美しく見える。予は白い小石を拾ひ、赤い小石を拾ひ、青



千本松原

い小石を拾ふ。白いのが最も美しい。水中にあるのが殊に美しく見えるので、波のひいた所へつけ入つて取らうとする。又波がすぐ寄せてくる。波が引く、取らうとする。又波がすぐ寄せ返す。とらうと片足の足袋を濡したが、その小石も取れなかつた。波が石を惜しむ様に感じた。三十間許の沖を、鵜が三羽かづい

(二) 駿河國富士郡元吉原村にあり。

ては泳ぎ、かづいては泳ぎ、東の方へ泳ぎ行く。鈴川の邊から小舟が二艘、ゆたゆたと櫓を押してくる。のたりのたりの波と能く調和してゐる。煙のやうな風が吹いて、天氣が一層ぼんやりとしてきた。

七 千本松原下

予は六代松を見る心組であるから、この邊から上つたらよからうと氣づいて、松原に向つて上つた。松原を通り抜けて里へ出る道がついてゐる。その道端の松の中に荷車を置いて、づんぐりとした親爺が砂

(三) 平維盛の長子六代、この地にて將に刑せられんとせし時、鎌倉より赦免の使者到着して、刑を免れし遺跡なり。

利を磯から荷車へ運んでゐる。予がその親爺に六代松の所在を尋ねると、親爺は先づ鉢巻の手拭を外し、姿勢を正して答へた。はい、六代松で御座いますか。私はこの村の者ではありませんが、人様に尋ねられてもと思ひまして、聞いて置きました。六代松と申しても松はありません。あそこに墓場があります。向ふの垣根とその墓場との間を右へ曲れば、向ふに小さい森が見えます。その森の中に標の石が立つて居ります。はい。先の馬車を勧めた男と云ひ、今この男といひ、予はその篤實なるに深く心を動かしたのである。

なる程、六代松と云ふ松はない。常磐木の小さなこ
んもりとした森の中に、ささやかな石が立つて居つ
た。非常に大きな松があつたとの事だが、今はその根
株の跡すらわからぬ。幾百の生首を一まとめにして
埋めた事跡とはちがつて、危き命を助かつた人の悦、
その従者どもの悦、助けた人は勿論、守護の任に當つ
た北條主従に至るまで嬉し涙にくれた様、眼の前に
見える心持がするのである。

予は、松原の中を縦に通つてゐる道を歸つてくる。
女兒共の松葉を搔いて居るのが幾組もある。道理で、

僧文覺の苦請に
よりて救免せら
れしなり。
北條時政。

松原は塵もとめぬほどに掃除されてゐる。

この松原に就て大いなる愉快を禁じ得ぬことが
あつた。それは十餘町も往復する間に、松葉搔に幾組
も出逢うて、この地方の者が松原で薪料を求めること
が知れたに拘らず、篠一本、小松一本、刃物を以て切
つた跡を見なかつたことである。予はかく心づいて
から、餘程注意して見たが、遂に切取つた跡も、折取つ
た跡も認めえなかつた。如何にも人氣の篤實な地で
あると云ふことが明かに察せられる。この立派な松
原が少しも損はれずに今日に傳はつたのも、決して

偶然では無い。官林の事であるから、妄に竹木を切つてはならぬとなつて居るには相違ないが、人氣が篤實でなくて、どうしてそれが行はれよう。何の辨へもない兒童に至るまで、少しもその禁を犯さぬといふのは、理窟の力ではなくて、民衆の美質に依ることは疑ふ餘地も無い。初めて沼津に来て、何とはなしに平和の趣を感じた予は、今はそれを知識的に觀察し得たのである。富士の眺も美しい、静浦の眺も美しい、千本松原も美しい。しかしながら沼津の人氣の篤實な眼に見えない美しさにはとても及ばないのであら

*千本松原より東南、伊豆に近き海濱をいふ。

う。

このやうな事を考へながら、急いで歸つてくると、雨がぼつぽつ落ちてきた。予が松原を出ようとすると、松林の小高い所に、十二三の男の兒が三人遊んでゐる。そこに居た犬が予を見て俄かに吠出して、予に向つて走つてくる。男の兒は頻りと犬を叱る様子であつたが、予は犬の吠えるのには眼もくれないで出て来る。犬は益々吠える。やがて男の兒は走つてきて、犬を捕へて吠えさせない。予は茲にも一點の美を認め、もと來た子持川の脇へと出た。見渡した沼津の宿

はほんのり霞をこめて、春雨が靜かに降つてゐるらしい。(伊藤左千夫の文に據る)

八 旅行の心得

旅行して口惜しきは、我が財をもつ事少なきよりも、我が學を積める事のいまだしきなり。歴史に詳しく通じ居らんには、わづかに遺れる、古の河の流域の墟、或は破れたる寺、頽れたる塚などに臨みても、限なき感を起し、人知れぬ興をおぼえて、身に沁み、心に留る事も多かるべきを、何事のありし處とも知らず、我

が學の疎きまま、趣味も無く、草鞋のみ數多くはき破りて、そこそこに通る過ぎなんは、口惜しきことの一つならずや。地理をよく知らんには、路の通塞をも難易をも胸に曉りをれば、日暮に猶宿るべきところを得て迷ひありくなどいふ、愚かしき目にも會はず、唯僅かの迂路をせざりしたため、惜しき名勝を見落すといふやうなる事もなく、よるづにつけて心たしかに、便多かるべきを、地理に暗きたため、あらぬ心づかひをなし、良からぬものに欺かるるなど、口惜しきことのかぎりなり。

草木禽獸につきての知識乏しければ、總ての物を大様にのみ見て過ぐすほどに、異なる郷の珍しき花禽を目にしながら、唯、紅き花咲き居たり、白き禽翔り居たり。とばかりおぼえて、何一つ明かに識るといふことなく、後に人に問はるることなどあらん折、知らず、知らずとのみ答へんは、これ亦口惜しからずや。又農工の事につきても、繪畫彫刻の道につきても、總て我が學淺ければ、我が趣味の乏しきまま、我が興も薄く、千里の路を行きて疲勞のみ覺えたらんは悲しからずや。無學にして旅するは、恰も盲人が花の林を行

くが如く、總ての美しき物をも認めずして過ぎん。學問は、急に如何とも爲しがたし。されど注意といふことは、我が心の置きかたにて、深くも淺くもなるべければ、旅にありては、如何なる物にも、事にも、勉強て深く注意すべし。注意は知識を生じ、やがてはその人を趣味豊かなる人となして、すべての事物につきて興を多からしむるものなり。學淺くとも、注意だに深くば、旅はなかなか興多くして、しかも旅したるがために、少なからぬ利益を得んこと疑あるべからず。旅日記は必ずその日その日に記すべし。一日怠り

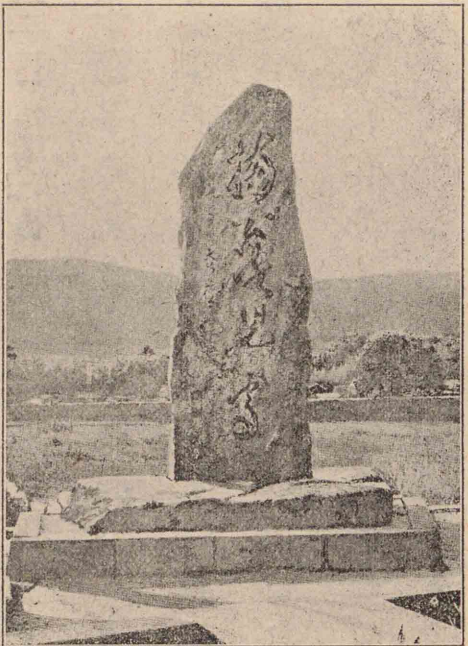
ては、次の日いよいよ怠り勝ちになるものなり。甚しく疲れて、筆持つにだに堪へ難く思はば、他日記憶を喚出すに足るべきかどかどをなりとも、記し置くべし。
(幸田露伴)

九 櫻井の里

楠木正成、子正行を率ゐて攝津國兵庫に赴くや、男山のかなた、淀河に沿ひたる櫻井(二)に馬をとどめ、正行を膝もと近く呼びよせていふやう、この度の戦は天下安危の決する所なり。我生きて汝を見る事、これや

(一)山城國八幡町、木津川南岸の阜陵、頂上に八幡宮あり。
(二)攝津國三島郡島本村大字櫻井。楠公訣兒處と刻せる碑あり。

限ならん。こは武士の定まれるならひ、悲しむべき事にはあらねど、唯心にかかるは御代の行末なり。我死



櫻井の里

なば、天下は悉く尊氏が代となりぬべし。然らん時に、汝は一旦の身命を全うせん爲、多年の忠烈を失ひて、ゆめゆめ

降人に出づるやうなる事あるべからず。家子、郎等の一人も生残りてあらん程は、金剛山にたてこもるべ

し。若し敵寄せくるやうの事もあらば、一命を抛ちて、君の御爲に盡すべきのみ。聞けよ、獅子は子を産みて三日を経る時、數千丈の石壁よりこれを擲つに、その子獅子の氣ある者は、教へざるに跳ねかへりて、死する事なしとぞ。汝已に十一歳になりぬ。我が子ならば、父が言ふ事を聞きわけて、これより疾く河内へ歸れ。母も待つらんぞ」と、頭かき撫でつつ、「こは畏くも天皇より賜はりし菊作の刀なり、形見にせよ」とて渡す。正行は先より父が言ふ事を聞きつつ、只うつぶして涙にくれたりしが、歸れと言はるるに、膝立直し、あ

な痛ましき父上の仰言かな。いかで父上の死をよそにして別れ申し侍るべき。連れさせ給へ」と、鎧の袖にすがりて泣く。正成「さても聞きわけなき子かな。我が言ふ事を蔑にする不孝者、さらば我が子にあらず」と、袖ふり拂ひて怒る。

時に、郎等の従へるものあり、正行を連れのをきて事の理を説く。正行大いに悟り、ひたすらに父に詫言して、仰謹んで承るべし」といふ。やがて銚子持ちいで、別の盃など取りかはすに、松の露はらはらと零れて、山崎のわたり幽かに名のるは、血に鳴く山時鳥にや。

*山城國乙訓郡。

菊水の幕は取拂はれて、同じ章の旗押立て、馬に跨がりたるは父正成、水干の袖括して、錦囊の寶刀を抱きて立ちたるは子正行。行く者には郎等あまた附添ひ、歸る者にも家子また従ふ。これ楠公父子の生別。その悲しさは死別にも勝りたりしならん。(落合直文)

一〇 競馬

私は某祭典の競馬に是非加はつて見ようと、その日の來るのを指をり數へて待つて居た。さて待ちに待つた某月某日は日本晴の好い天氣で、朝からして、

はや幾萬の參拜者は競馬場の周圍につめかけ、十重二十重に人垣を造つて居る。

十五回目の勝負がすむと、各隊聯合の大競馬がくみあはされた。砲兵の殘雪と宮野、輜重兵の鯨波と群雀、それに私の乗つた騎兵の金石である。見よ、馬場の起點に頭をならべた五頭の馬匹を。何れも各隊選り抜きの名馬で、特に鯨波は去年も各隊の聯合競馬に一等賞を得た逸物、その他宮野といひ、群雀といひ、何れ劣らぬ駿足、また殘雪は某隊長の副馬で、みな侮るべからざる強敵である。しかし金石も輕輕しくひけ

を取るべき馬ではない。

金石は福島縣田村郡三春の産で、當年七歳、身幹四尺八寸、體量九十三貫、紅鹿毛、特徴は新月形の星額、頭は軽く、眼は澄み、威があつて、實に完美な馬であるが、一つ恐るべき癖がある。若しも彼の左の牙齒へ大銜オウケが一寸でも觸れたら、それこそ一大事、溝でも岡でも、何處と云ふ差別なく狂ひ奔るのである。この場合には、如何に巧な乗手でも、彼が大障礙物に衝突して彼自身止まる迄は、決して御し得ぬ難物である。しかし私は未だ一度もその癖を起させない、私は聊か彼を

御する秘訣を自得して居る。とにかく有名な癖馬であるから、これまでの競馬には誰も乗手が無かつた。随つて彼の眞の速力は世に知られなかつたが、今この一組の勝負で以て、わが金石の實力の如何をためす時節が到來したのである。

棧敷で見物してをる各隊の將校は勿論、下士卒に至るまで、口にこそ出さぬ、騎兵に負けるな、輜重兵に勝たすな、砲兵に劣るなと、各、自分の最良最良に、手に汗握り、肩を怒らして力んで居る。嗚呼、この勝負、果して如何、この晴の場所でも、私は寧ろ自ら信ずる所が

あるため平氣であつた。しかし金石は私よりもなほ平氣であつた。一度この馬場を踏んだ馬は、既に頭を並べた時、鬣立ち、眼怒り、或は前肢を揚げて空を叩き、或は後脚を躍らして土を蹴り、今にも飛びださうといふ勢で、助手の二人も附いて兩口を取つて控へて居ないと、合圖まで待ちきれない有様である。然るに私の乗つた金石は四足を揃へて正駐立の姿勢を取り、靜かに命令を待つものの如くであつた。

程なく、競馬係は時刻を計り、注意の聲とともに前進の合圖を鳴した。待ちかまへた乗手が手綱をゆる

Metre. 佛國尺度の名。
我が三尺三寸
*許に當る。

めると同時に、五頭の馬匹は吾先にと駈けだした。その速さ、何ともいへない。私は起點から約五百メートルの間は、ただ前馬の尻について行くのみで、少しも逐はない。この時の位置は、第一が鯨波、第二が殘雪と群雀とで、第三が宮野、最後が金石である。第一の鯨波と私の金石との間は、既に五六メートルも離れて居る。數千の群集は、「騎兵負けるな、負けるな」と囀り立てるが、私は少しも逐はない。注意して見ると、前の四馬とも皆手前を誤つて、右駈歩みぎかけあしに出して居る。七百メートル・八百メートルの處では、殘雪が眞先で、鯨波と

群雀とが雁行し、宮野が私の前に居る。互の距離は段段遠く、見物は益々叫ぶ。九百メートル、千メートル、まだ同じ位置で、約全距離の三分の二を經過した。

最早時分は好しと、私は軽く拍車を入れた。今まで前進力を抑へられて居た金石は、一時に逞しくその歩程を伸ばした。繰りだす前足の膝頭は、耳の高さまでも揚り、馬の腹は地を摺るがごとく、伸しきつたる四足は眞に空を蹴つて飛ぶやうである。私は少しく上體を前に傾け、手綱をつめ、又も二つ三つ拍車を加へた。見る見る宮野を乗越え、鯨波を切抜け、残雪に並

んだ時、はげしい喝采が起つた。

私は態と残雪に並んで、百メートル許、外側を進行した。その間相手の姿勢を見るに、拳上り、手綱は伸び、騎座は浮き、徒に拍車を亂打して居るけれども、始から全力を出した馬は、もう少しも感じない。ここに至ると、金石はまだまだ推進力が十分ある。

いで、一つ人目を驚かさうと、私は強く拍車を二回入れた。金石は小振ひして、忽ち残雪の鐙をこすつて、電光石火の勢で驀進した。その快速なこと、實に鞍の上になく、鞍の下に馬なく、ただ一陣の疾風である。

先登第一は無論である上に、決勝點に到着した金石は、合圖の砲聲と同時にびたりと駐止した。その手練の立派さ、自分ながら驚いた。これは私が得意の祕術を施したので、馬術の心得あるものは、皆驚いて舌を捲いた。併しながら私が名譽ある特別優等賞を得たのは、全く金石が名馬であつたからである。

(某騎兵の文に據る)

一一 日本海の家戰上

五月二十七日の曉天に、南方の哨艦たる假裝巡洋

*
明治三十八年。

艦信濃丸の無線電信は、敵艦隊見ゆ。敵は東水道に向ふものの如し。と報ぜり。東郷司令長官は夙に敵軍の行動を偵知して、對島海峽に我が精銳を集中したりしかば、全軍これを聞いて踴躍し、各豫定の持場を固めたり。午前七時哨艦和泉も敵を發見して、その勢力陣形・針路等を本隊の旗艦三笠に報じ、その儘敵の艦隊と接觸を保ち、時時刻刻の動靜を報じつつ、北東さして進航せり。かかる間に、片岡中將・出羽中將・東郷少將の引率せる諸艦隊も次第に現れ來り、屢敵の砲撃を受けながら、能く接觸を失はずして、對馬の東なる

沖の島附近まで敵を誘致せり。

この日、海上濛氣深くして、五海里以外は黑白も見え分かざりしかば、敵はこれを幸に、我が艦隊の目を暗まして、浦潮(ウラ)の方に遁れんと思ひしに、我が諸艦の報告によりて、數十海里を隔てたる敵の進退動靜の、一一我が旗艦に映ずること、鏡をかけて見るが如くなりき。沖の島に至るまでは、兵士皆戦闘配列に就きながら、随意休憩を許されたるが、準備終りて上官の巡視せし時には、兵士等砲彈等を枕にして、鼾の聲雷の如くなりき。古今の大戦を前に控へて敵前にあり

(一) Vladivostok. シベリヤ東端の海港、シベリヤ鐵道の終點。敦賀より五百海里。

(二) Souvaroff.

(三) Ossliabya.

ながら、物とも思はぬこの膽勇を見て、司令官等深く歎稱し、軍にははや勝ちぬと頼もしく思ひけり。

かくて我が本隊は沖の島附近に敵を迎へ、遙かに彼方を見渡せば、豫て諸艦の報ぜし如く、敵は二列縦陣にして、主力の四戦艦は右翼列の先頭にあり、司令官の旗艦スワロフ真先に進み、又オスラビヤ以下の四戦艦は左翼の先頭たり。海防艦・巡洋艦・特務艦船等次第に濛氣の中より現れ出で、その長さ數海里に互れる有様は、實に世界の壯觀なりき。

午後二時に近く、戦機已に熟しぬ。旗艦三笠の檣頭

(一) Nelson.
(1758-1805)

(二) Trafalgar.

に大戦闘旗の颯と翻るや、戦闘の號音勇ましく、旗艦は全艦隊に對して、皇國の興廢この一戦に在り。各員一層奮勵努力せよ。と信號旗を掲揚せり。この信號は、ネルソンがトラファルガルの海戦に於て、英國は諸君の努力を要求す。といひける信號と同じく、忽ち世界に傳誦せられたり。

一二 日本海 of 海戦中

ここに於て我が主力隊は東郷大將直率の主戦艦隊を先鋒とし、上村中將の装甲巡洋艦隊これに續き

て、吉例の單縦陣を布き、正にこれ大鵬の雲に翰つが如く、巨鯤の浪を破るが如く、驀地に敵前に出で、出羽瓜生東郷(少將)の諸戦隊は遶りて敵の後尾を衝かんとす。

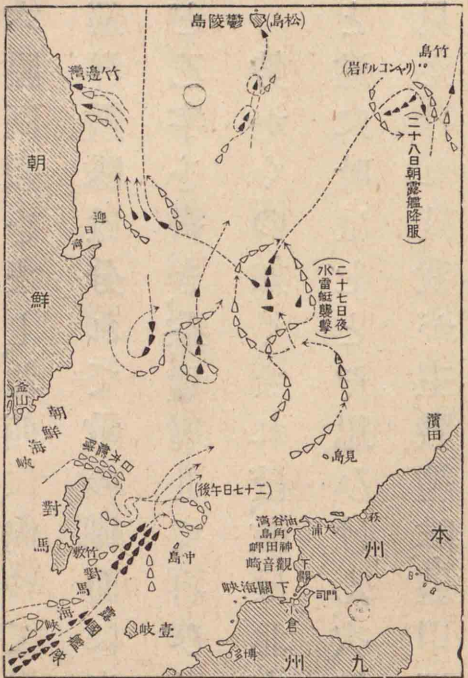
敵はかくと見て直に發砲を始めたれど、我が艦隊は靜まり返つて應砲せず。射距離六千米突に入るや、斜に敵の前頭を横ぎりて、敵と丁字形を成せる我が主力隊は、茲に一齊に敵の兩先頭艦に砲火を集中したれば敵の諸艦も劣らじと應戦し、砲聲天地を碎くが如く、海水湯の如く沸返れり。この日西風烈しくし

(-) Alexander III.

て砲煙海面に漲り、濛氣と相合して四顧冥冥たり。物
 すごきこと言ふばかりなし。されども我が陣形は優
 越、技術は卓抜にして、殆ど百發百中、敵の左翼先頭艦
 オスラビヤまづ大火災を起して、戦列を退きぬ。續い
 て旗艦スワロフ、二番艦アレキサンドル三世も火災
 を起して列を離れ、後續艦亦續續と火を失せり。東郷
 大將は後日に至りて、「勝敗已にこの間に決せり」と報
 告せり。

哨艦和泉は初より敵艦隊と觸接を保ち來りしが、
 砲戦始まると見るや、俄かに艦首を回らして、敵の砲

尾張國瀬戸町の
 西南。天正十二
 年(三十四)四月、
 徳川家康、豊臣
 秀吉の軍をこの
 地に破る。



火の集中するを物ともせず、獨力應戦して、遂に本隊
 に合せり。和泉がこの武者振は、昔、長湫の戦に本多忠
 勝が手兵三百を以
 て豊太閤の數萬の
 軍と並び行き、遂に
 家康の軍に合した
 るに似たりとて、皆
 人歎稱したりけり。
 かくて敵は北上の道を遮られ、只南東にと壓迫せ
 られしが、かくては目的を達すべき道なしと思ひ

けん、俄かに北方に回頭し、死物狂の勢を以て我が後尾に廻り出でんとしければ、我が主戦艦隊も急に十六點回頭をなし、北西に向つて敵の前頭を壓し、装甲巡洋艦隊は分れて敵の側面に出で、敵を中にして殆ど乙字を畫き、益、猛射して再び敵を南方に壓したり。勢かくの如くなれば、敵は北方に血路を開かんと遂に叶はじとや思ひけん、次第に南方に遁るべく見えければ、我が主戦艦隊、装甲巡洋艦隊、諸艦隊、此處彼處に分れて、餘さじ、洩らさじと掩撃せり。されば前に戦列を離れたるオスラビヤスワロフアレキサン

(一) Borodino.

(二) Ural.

揚子江以北の支那沿海の總稱。

ドル三世を始め、戦艦ボロヂノ・特務艦ウラル等破壊沈没する者少なからず。この間、鈴木・廣瀬の驅逐隊が白晝、壯烈なる水雷攻撃を決行せしは、特に記すべき所なり。

かかる間に夕陽已に黃海に没し、豫て定めたりし驅逐隊、水雷艇隊、東・南・北の三面より漸次に敵に迫りければ、我が主戦隊は戦場を新手に譲り、全艦隊一時引揚げて、明朝鬱陵島に集合することとなり、この日の軍は果てにけり。

豫て夜戦は水雷攻撃と定めしかども、朝來、烈風激

浪を揚げ、夜に入りて波浪未だ収まらず、水雷艇の不
利甚しかりき。されどこの千歳一遇の戦に一撃を試
みずんば、生残りても何かせんと、驅逐隊艇隊は、日没
前より來集し、先を争ひて敵に當れり。敵は探照砲火
を以て極力防戦し、白虹紫電、雨の如く海中に飛ぶ。夜
戦の壯觀譬ふるに物なし。我が襲撃隊争でかこれに
擬議すべき、一時に突進して敵の周圍に蝟集肉薄し、
その攻撃の猛烈なること殆ど言語に絶しければ、敵
艦應接に追なく、しかもその距離餘りに近かりし爲、
備砲俯角の度を過ぎて、照準を取ること能はざりき。

この夜戦に、敵の戦艦装甲巡洋艦等の、或は沈没し、或
は戦闘力を失ひしもの多く、敵の陣形全く亂れたり。
而して我も亦水雷艇三隻を失ひぬ。

一三 日本海の家戦下

明くれば二十八日、きのふの濛氣なごりなく霽れ
て、沖の鷗も見逃すまじく、追撃戦にはこの上もなき
好天氣なり。諸戦隊皆豫定の如く、黎明より鬱陵島集
合の途に在りしが、早くも敵影を發見して、主戦艦隊
装甲巡洋艦隊、東郷・瓜生の諸戦隊は、隱岐の西北なる

(一) Nebogatoff.

竹島の南方にて、この敵を包圍せり。これなんネボカトフ少將が擊殘されたる主力を率ゐて北方に奔る一隊にて、戰艦海防艦巡洋艦合せて五隻なりしが、敗餘の殘艦已に抵抗の力なく、我が艦砲火を開くや、忽にして白旗を立てて降意を表しければ、特に將校以上の帶劍を許し、その降を受けたり。獨り巡洋艦イヅムルードはその快速力を利用して遂に北方に逃れ去りぬ。

かくて諸戰隊は八方に索敵運動をなして、或は殘艦を擊沈し、或は生存者を救助、收容せり。中には磐手

(二) Izumrud.

(三) Admiral Oustakoff.

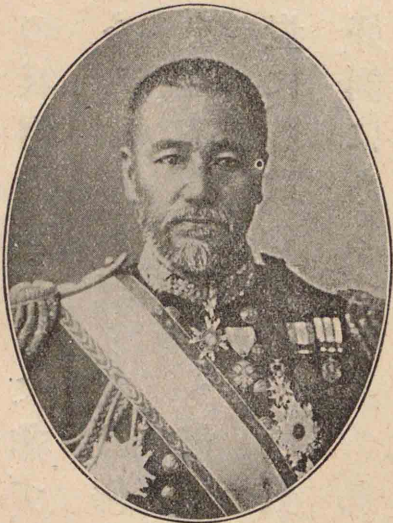
八雲の一隊は敵艦アドミラルウシャークフを發見して降伏を勸告せしかど、彼はこれに應ぜず、甘んじて擊沈せられたり。敵ながらもあつばれなる振舞なり。きのふオスラビヤの沈沒せし時、その艦長が生存して收容せらるるを辱しとせず、艦橋に立ちて自殺せしと相並びて、一對の美談たり。

ここに驅逐艦漣陽炎は鬱陵島附近にて敵驅逐艦を發見し、極力追撃して、午後五時砲火を開きしに、敵は白旗を掲げて降を乞ひ、艦内に將官の在ることを信號せり。事の様不審なれば、我が士官は日本刀を帶

*Rojstvensky.

し、兵は小銃を携へて臨檢せしに、豈に料らんや、敵の司令長官ロジェストウエンスキー中將及び幕僚等ここに匿れ居たり。中將は重傷を負ひたれば、その懇請を容れて、只數人の將校のみを我が艦に收容し、綱を以て降艦を引きて佐世保に入りぬ。きのふまでは大國の司令長官として海洋に暴威を振ひしが、今日は捕虜となりて敵國の士官に引かれ行く、あはれといふも愚かなり。

かくの如くして、敵艦三十八隻の中、八隻の戦艦はその六を撃沈し、その二を捕獲し、その他装甲巡洋艦



東郷大將

以下も亦或は撃沈し、或は捕獲し、或は抑留し、もしくは武装を解除したり。その辛うじて逃れ得たる者僅かに二隻のみ。捕虜は司令長官以下無慮六千と注す。而して我が失ひし所は水雷艇三隻、死傷六百人にして、その他艦艇に多少の損害を受けたれども、今後の役務に支障あることなし。

今回の如き大捷、鏖戦は有史以來の海戦に未だ曾

て聞かざる所なり。有名なるトラファルガルの大捷
すら艦船の損害少なからず、子ルソン提督は壯烈な
る戦死をなせるに非ずや。敵と我とを比較するに、そ
の兵力大差あるに非ず、却て敵は子ルソンが勝を得
たる陣形を取り、我は佛蘭西艦隊が敗を取りし位置
を占めたり。しかも能くかくの如き大捷を得たるは、
豈に、勝敗の原因が物質にあらずして精神にあるの
好例にあらずや。

捷書、宸聰に達す。五月三十日、聯合艦隊に勅語を賜
ふ。その中に宣へることあり。

朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得
ルヲ懌ブ

東郷大將奉答の語に亦曰へり。

コノ海戦豫期以上ノ成果ヲ見ルニ至リタルハ、一
ニ陛下御稜威ノ普及及ビ歴代神靈ノ加護ニ依ル
モノニシテ、固ヨリ人爲ノ能クスベキ所ニアラズ。

平和克復の後、米國の一富豪は我が邦に來遊し、歸
りて國人に語りて曰く、日本人は已に歴史上未曾有
の大捷を忘れたるが如く、今や専心、戦後の經營に従
事せり。と。ガーター勳章を捧げて渡來し給ひし英國

* Garter.

も見える。景色の雅なこと、誠に一幅の名畫を展げたやうな趣がある。

今は昔、このあたりに湖山長者といふ名高い豪家があつた。住家は王侯の宮殿のやうで、その中には金銀財寶が積んで山をなして居た。衣るには美しい綾錦があり、食ふには山海の珍味があり、使ふには數十百人の婢僕があり、そして所有の田地は見渡すかぎり廣廣と、稻の波を打つて居た。たとへば、天下の富を此處に集めたかと思はれるばかりで、世の中の事何一つ、この長者の思ふままにならぬものはなかつた。

ある年、夏の田植時のことである。湖山長者の家では、季節中の最上吉日を卜して、その廣田に田植をすることになつた。長者の家に使はれてゐる者は勿論、近郷近在の者ども迄、今日こそ長者の田植だといふので、老幼男女數を盡して、身支度かひがひしく、我も我もと田圃をさして出掛けて行く。長者は高殿の欄干に凭れて、目も及ばぬ田地を遙かに見渡しつつ、己が限ない富に、思はず得意の微笑を漏してゐた。

仕事は面白いやうに運んで、早苗を取る男女の手の動く度毎に、濕つた黒い土の色が、片端から青く青

く變つて行く。そのうちに正午になつた。やがて夕暮
近くなつた。仕事はめきめきと運んだが、名に負ふ長
者が廣い田地のことであるから、植ゑるに果しなく、
まだ數段残つてゐるうちに、日ははや西の山に入ら
うとした。

長者はこれを見て、ああ、今少し日が高くば全體め
でたく濟まうものをと、暫し深い思に沈んでゐたが、
つと立つて黄金の扇を持つて來て、さつと開いて、今
しも沈まうとする夕日を三度までさし招いた。

見る間に、山の端にかかつた夕日は三段ばかりの

ぼつて來た。田に立つた村人等は、天道様を左右する
長者の威力を見て、いかに驚いたであらう。かくして、
これまでと思つた田植も思ふままに捗つて、その日
は無事に暮れた。

寢覺の牛の聲がゆるやかに響いて、夏の短い夜は
やがて明けた。朝の床を起出でた長者は、入日を招き
返した喜と心驕とで、眼中いよいよ何ものもない。傲
然とした態度で召使や村人を呼んで、昨日一日で植
ゑあげた田の様子を見て來い。と命じた。ところが、出
掛けて往つて、誰一人腰を拔すばかりに驚かぬ者は

なかつた。

驚くのに無理はない。

見よ、さしにも廣かつた長者の田地は跡形も無く消えて、漫漫とした湖が、朝嵐に白い波を立てて居るではないか。數千人で一日植ゑつけた早苗は一本も見えないで、渚には群立つ蘆が波に洗はれ、風に戦いで居るではないか。

長者の家はこの時から一日一日に衰へた。そしてつひに、この廣い田とおなじやうに、全く亡びてしまつた。
(五十嵐力「趣味の傳説」に據る)

一五 賭け碁

甚しき碁好きの男、碁を圍む時、心の散らぬやうにとて、ちひさき離れ座敷を作りしに、普請も思ふ儘に成就しければ、誰にか頼みて額を書きて貰はんと心がけるうちに、ふと謀計を案じつきて、ある書家の來れるをしほに、「私と尊公と一局の勝敗を決して、尊公お勝ちにならば一盃献上しませう程に、私勝ちたらば、良き語を擇びて、新しき小座敷に掛くる額を御揮毫下されたし。」といひ出し、「なかなか貴殿には及ばず。」

と卑下する書家を強ふる様にして、終に賭けの勝負をはじめたり。もとより書家の弱きを豫てより知れることなれば、手もなくまかしおほせて、「さあさあ」と筆おしつくるに、書家も口惜しくは思へども、是非なく、「さらば」とて、日勝の二字を墨黒黒と書き與へ、そこそこに歸らんとす。あるじは、この語のさいさき吉きに笑みを浮べて、「日に勝つとは身に取りて嬉しき語にて、失禮ながら、文字の勢も互えてお見事に出來たること、満足この上なし。さりながら日新といふ額は諸方にて見掛けれど、日勝といふ二字の額はあまり

見受けず。これも出處あることとは存ずれど、御存じの無學にて不案内ゆゑ、お教へ置き下されよ」といふ。書家笑ひながら、拙者も出處のなき語などは決して認めず。併し出處をお教へ申すことまでは賭け申さざりしことゆゑ、これにて御暇申す」といへば、主人頭を搔き、成る程成る程、いやこれは」といひいひ、急に手を叩き、婢を呼びて、酒肴を出すやうに命じ、「まづ」と引留め、いろいろにもてなし、さて書家の好き程に酔ひて、機嫌よき高笑ひの出づる様になりたる頃を見はからひ、「賭けは賭け、ただ御懇意づくにて、此の語のい

宋の文學者。二
六八—七六

王安石、宋の政
事家、文學者。二
六八—七四

はれをお教へ下されたし、自分の掛けて置く額の文
字の出處・意味を詳しく知らぬも餘りなれば」といふ。
書家はそろそろと煙草入を腰にさしながら、これは
もと蘇東坡の語に日勝日負とあつて、善く勝負事を
するものも、日に勝つて、日に負くるものである。ど
うせ勝つたり負けたりするものであると申したを、王
荊公が、それでは語がおもしろくないとて直された、
名高い話のある語で」といひかくなれば、亭主は日に負
くると聞いて、恐ろしく悪くしたる顔色を辛くも取
直して、成る程、日に勝つて日に負くとあつては、面白

く御座らぬ。其の王荊公とやらは何と直しました。こ
れは直さずばなりません。何となほしました」とい
ふ。書家、わが座の前後をよくよく見まはし、さやう、實
に巧く直しましたな。やはり初の字は日勝と其の儘
にしまして。成る程、日に勝つて。これは動きまますまい。
好い語ですな。あ、いや、後が尙よいので。へい、日に勝つ
て。日に勝つて。それからは、日に貧しと直したので御
座る。何と警拔では御座らぬか。大きに御馳走さま。さ
やうなら。 (幸田露伴—小品十種)

一六 動物の保護色上

等しくこれあぶら蚜蟲なり。しかも緑色の嫩芽に附けるものは必ず緑色にして、黒き枝に附けるものは自ら黒く、楓の赤き芽に附けるものは必ず紅なり。單に色のみにあらず、木の幹にとまる蛾の類には、斑紋まで同様にして、容易に見分くる能はざるものあり。廣く動物に就て調査するに、動物の皮膚の色がその住所の色に似ることは、普通一般の規則にして、似ざるものこそ却て例外なれ。

緑葉の上にとまる動物は、雨蛙をはじめ、芋蟲、蝗、蜘蛛

蛛までも皆緑色にして、枯草の中に居るものは皆枯草色なり。沙漠地方に住する動物は、獅子、駱駝、羚羊の類を始として、鳥類にても蟲類にても一様に黄沙色を有す。されば沙漠にては、樹木、岩石等の隠所なきに拘らず、これ等の鳥獸を見分くること頗る難し。これ往往、旅行者の紀行中に見るところなり。

又北極地方には概して白色の動物多く、四季雪の絶えぬ邊には、常に白色を呈する白熊、白梟の類居住し、夏期雪の消ゆる處には、冬期のみ白色に變ずる雷鳥、白狐、白鼬の類棲めり。海底の砂に半ば埋れて棲め

る鰈。比目魚などは、背面の色も模様も全く砂の如くなれば、水族館に飼養するものすら、餌を求めて泳ぎ出す時、纔かにそれと知らるる程なり。又海面には、透明にして容易に眼に觸れざる動物あり。風穩かに、海面鏡の如くなる日、試に小舟に乗りて沖へ漕ぎいづれば、海面には海月、蝦の類にして全く透明なるもの、小は一二寸より、大は一尺以上のものまで、夥しく浮游すれども、初心の採集者には、なかなか見あたらざるなり。

又動物の種類によりては、色と模様とのみに止ま

らず、身體の全形までも他物に類似して、殆ど識別する能はざるものあり。その最も有名なるは、琉球邊に産する木葉蝶、日本の到る處に産する桑の尺蠖、及び南洋諸島に産する木葉蟲などなり。

木葉蝶は翅の表面に美麗なる色を有せり。されど裏面は全く枯葉色にして、翅の全形また少しも木の葉と違はず、葉脈その儘の模様まで備はれり。されば翅を閉ぢて梢にとまるときは見出し難し。この蝶を産する地方を旅行せし博物學者の紀行に、「木葉蝶の飛びをるを見出し、確かに梢にとまりたるを見届け

たれど、容易にわからず、一時間餘を費して漸く搜し



尺蠖 木葉蝶 木葉蟲

出したるに、全く目前に居たり。など記載せるを見る。先年、或人、翅を閉ぢたる木葉蝶の標本を枯葉の

附ける林檎の枝に添へ、硝子箱に入れて多くの人に示したるに、何人もこれに心附くものなく、程過ぎて後、僅かに一人、蝶の頭と觸角とを見出し、この枯葉の下に一つの蝶隠れたり」と叫べり。何ぞ圖らん、その枯葉と思へるものは即ち蝶自身の翅ならんとは。

一七 動物の保護色下

又桑の害蟲たる尺蠖の如きは、色も形も桑の小枝そのままにして、我も人も常に能く欺かる。總てかかる蟲類は、己が身の色彩形状の他物に類似せることを十分利用する性質を備ふるものなり。この蟲なども、體の後端にある二對の足をもて桑の枝に附着し、

身體を一直線に延ばし、恰も小枝と同じ位の角度をなして立ちたるまま容易に動かず、なほ口よりは細き線を吐き、これを以て頭と枝との間を繋ぎ、成るべく疲労せざらんとせるが故に、長き間少しも動かざるなり。されば農夫も往往これを眞の小枝と誤認し、土瓶などを懸けて失敗することありといふ。かくまで小枝に類似するが故に、容易に鳥類の捕獲を免れ、夜に入りて鳥類の埒に歸れる頃、徐徐に這出して盛に桑葉を食ふ。實に桑に取りては恐るべき害蟲なり。又南洋諸島に産する木葉蟲は、全身綠色にして、木

の葉の如き形狀を呈し、葉脈に相當する線まで總て酷似するが故に、これも木にある時は、周邊の木の葉と識別し難く、假令目前に在りとも、容易に見出す能はざるなり。

以上は何れも他物に似たる爲に容易に身を護る例なれど、ここに又他物に似たる爲に容易に餌を捕へ得る動物あり。例へば、蜘蛛の類に鳥の糞と全く同様の色彩・形狀のものあり、木の葉の表面に靜止して蝶などの來るを待つ。蝶などの類には好んで鳥の糞に飛來る種類もあれば、蜘蛛は即ち捕りて之を食ふ。

又蜘蛛の中には、蟻と寸分違はぬ形のものあり。元來蟻には六本の足と二本の觸角とあれど、蜘蛛には觸角なくして八本の足のみなれば、大いに形狀を異にすれども、この蜘蛛は前足を蟻の觸角の如く動かし、他の六本の足にて走る故に、全く蟻の如くに見ゆ。常に木の葉の上に居て、蟻の來るを待つ。蟻は敵と知る由もなく、近くまで寄り來れば、容易にこれを捕ふ。かのアフリカの沙漠にて、駝鳥を捕ふるに、土人が駝鳥の皮を被りてこれに近づくと同理なり。

(丘淺次郎—進化論講話)

*Africa.

一八 征衣上途

動員令のあつたその日から殆ど一箇月目、即ち明治三十七年五月二十一日、これぞ生涯忘れることの出来ない嬉しい日であつた。

愈、戰地へ行かれることになつて見ると、半時も早く出發したいと、誰一人思はない者はなかつた。さてその待ちに待つた出發の日は決定して、午前六時城内練兵場に整列せよとの命令が下つた。

日頃の熱望ここに達して、男兒の本懐これに過ぎ

るものはない。我等の歡喜は無限であつたが、この歡喜と共に、又暗涙の浮ぶのを禁じ得なかつた。丈夫涙無きに非ず、離別の間にそそがず」とか。無論、今更戀戀として家を顧み、親を慕ふのではないが、生きて再び還らぬ決心があればある程、これが親子・兄弟今生の見納かと、流石に悲愁の思に閉されて、よしや紅涙襟を潤すには至らずとも、眼底には一點の涙なきを得ないのが、人情の常であらう。

出發の前夜は舊友の寫眞を出して見たり、机の中を片付けたり、死んだ後で、留守の者に何一つ分らぬ

ことのないやうに、それぞれ整頓してから、疊の上での最後の眠を求めようと、寢床に就いた。

暫しまどろむと思ふ間もなく、柱時計は午前三時を報じた。すはとはね起き、冷水で身を清め、晴の征衣を着飾つて、宣戰の大詔を奉讀し、遙かに大君います東の空を伏拜み、次にこれを最後と、祖先の靈前に禮拜したが、この時は、汝は汝にして汝にあらず。陛下の御爲進んで難に赴け。未練なるふるまひして家名を汚すな」と誠められるやうな感じがした。さて家族一同、自分を圍んで別杯を舉げて、皆このめでたい出陣

を祝つてくれた。

「後の事は少しも心配するに及ばぬ。思ふ存分に働け。あつばれな功名をして、家門の花を咲かせてくれ。」私の事は決して御心配遊ばすな。武士の譽としてこゝんな嬉しい事は御座いませぬ。折角御體を御大切に遊ばせ」とは、ただに自分の家のみでなく、今日出征する人の殆ど總ての家家で、親子の繰返した悲壯な語であつたであらう。時は迫つた。自分は神前に備へておいた軍刀を腰に着け、勇みに勇んで我が家の門を後にした。

午前六時、聯隊は整列を終へ、軍旗は莊重な「足曳」の曲の吹奏に迎へられて、朝風に飜つて居る。聯隊長は沈痛な音調を以て、故國を去るに臨みての最後の訓示を朗讀せられた。終ると、その發聲で、一同、大元帥陛下の萬歳を三唱した。

「第一大隊より前進」これ進軍に臨んで聯隊長が部下に下された最初の號令であつた。我等は既に征露の途に上つたのである。一同、血湧き肉躍るの思があつた。向ふ處は天も裂くべし、地も碎くべし。

長蛇の如き我が聯隊は、熱心誠意よりほとばしり

出でたる國民の萬歳の聲に送られて、勇ましく前進した。次第に遠ざかる靴の音、蹄の響は、いかばかり國民の耳に頼もしく聞えたことであらう。遠く近く響き渡る喇叭の音は、即ち親愛なる同胞に對する暇乞であつた。老も若きも手に手に國旗をふりかざして、萬歳の叫、天地をとどろかすを見聞しては、我等は誓つてこの至誠に報いなければならぬとの感慨を深くした。その後、度度の戦闘に、喊聲を揚げて敵壘に突撃する毎に、背後で、國民の萬歳の聲が潮の如くに湧起るやうに感じた。我等の喊聲は國民の萬歳の聲の

反響に外ならぬのである。巨弾耳をかすめる戦場の朝にも、嚴寒骨を刺す露營の夕にも、決して忘れることの出来なかつたのは、國民が熱血をしぼつて叫んだ萬歳の聲であつた。(櫻井忠温「肉弾」に據る)

一九 國民の義務

一 兵役

兵役は我が國民の最も大いなる義務の一にして、明治五年徴兵令を布きて、滿十七歳より滿四十歳に至るまでの男子は、皆等しく兵役の義務を有し、召に

應じて、國家の防衛に任ずべきものと定められたり。徴集したる壯丁は主として陸軍兵役に服せしむ。海軍兵は海岸・島嶼の壯丁より徴し、また志願兵をも採用す。將校を養成するが爲には、陸海軍ともに特設の機關あり。兵役を分ちて、現役・豫備役・後備役・補充兵役・國民兵役となし、一定の期間これに服せしむ。この令出でてより以來、武門武士の階級は全く廢せられ、國民ことごとく兵士となりて國家を防衛するに至れり。

明治十五年一月、陸海軍人に勅諭を賜ひて、

朕は汝等軍人の大元帥なるそされは朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰きてそ其親は特に深かるへき朕か國家を保護して上天の惠に應じ祖宗の恩に報いまゐらす事を得るも得ざるも汝等軍人か其職を盡すと盡ささるとに由るそかし我國の稜威振はさることあらは汝等能く朕と其憂を共にせよ我武維揚りて其榮を耀さは朕汝等と其譽を偕にすへしと宣はせられ、かつ軍人の日夜服膺して忘るべからざる道を訓へ諭させたまへり。

一 軍人は忠節を盡すを本分とすへし
一 軍人は禮儀を正くすへし
一 軍人は武勇を尙ふへし
一 軍人は信義を重んずへし
一 軍人は質素を旨とすへし
右の五ヶ條は軍人たらんもの暫も忽にすへか
らすさて之を行はんには一の誠心こそ大切な
れ抑此五ヶ條は我軍人の精神にして一の誠心
は又五ヶ條の精神なり心誠ならされは如何な
る嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて何の用に

かは立つへき心たに誠あれは何事も成るもの
そかし況してや此五ヶ條は天地の公道人倫の
常經なり行ひ易く守り易し
いかに兵制は完備し、軍器は精銳なりとも、兵士に
して忠良ならずんば、軍備の強大は得て期すべから
ず。およそ戦の勝敗は人にありて器にあらず。陛下が
勅諭を下し賜ひしも、亦實にこの故なりとす。而して
この勅諭は、啻に軍人の道たるのみならず、また一般
臣民の服膺すべき明教なり。

二 納 税

政府はもとより財産を有せず。されば出づるを量りて入るを制し、その財源を國民に求めざるべからず。國民は國用を充さんが爲に、その収入の幾分を出して政府に上納す。これを租税といふ。およそ國土に生存する以上は、これを統治する政府および自治體の費用を分擔すべきは、國民たるものの當然なる義務なり。

租税の種目を大別して、國税と地方税とに分てり。國税は國庫の收入にして、これを分ちて二とす。一を直接税といふ。地租・所得稅・營業稅の如きものなり。他

を間接税といふ。海關稅・砂糖稅・酒稅・織物稅の如きものにして、その消費者が間接に納税するものなり。故にまたこれを消費稅ともいふ。

地方税は多くは直接税にして、地方の政費に充てんが爲に、地方官廳および自治體が人民に賦課するものなり。

明治六年七月廿八日。

曾て詔して宣はく、「租税は國の大事人民休戚の係る所なり」と。それ租税は富の程度に基きて徵收すべきものにして、漫に苛税を加ふれば、民その負擔に堪へずして産業廢頽せん。故に租税を賦課するには議

會の協賛を経ざるべからず。(大隈重信—國民讀本)

二〇 座右の銘

- 一、父母をいとほしみ、兄弟にむつまじくするは、身を修むる本なり。本かたければ末しげし。
- 一、老を敬ひ、幼をいつくしみ、有徳を貴び、無能を憐む。
- 一、忠臣は國あることを知りて、家あることを知らず。孝子は親あることを知りて、己あることを知らず。

- 一、祖先の祭を慎み、子孫の教を忽にせず。
- 一、辭は中るべくして誠ならんことを願ひ、行は敏くして厚からんことを欲す。
- 一、善を見ては法とし、不善を見ては誠とす。
- 一、怒に難を思へば悔にいたらず。欲に義を思へば恥をとらず。
- 一、儉より奢に移ることは易く、奢より儉に入ることはかたし。
- 一、樵夫は山に入り、漁夫は海に浮ぶ。人各、その業を樂しむべし。

- 一、人の過をいはず、我が功にほこらず。
- 一、病は口より入るもの多し、禍は口より出づるもの少なからず。
- 一、施して報を願はず、受けて恩を忘れず。
- 一、他山の石は玉を磨くべし、憂患のことは心を磨くべし。
- 一、水を飲んで楽しむものあり、錦を衣て憂ふるものあり。
- 一、出づる月を待つべし、散る花を追ふこと勿れ。
- 一、忠言は耳にさかひ、良薬は口に苦し。(東里外集)

二一 一燈錢

この度同社中申合せ、自分自分の力を盡し、骨を折りて、瑣細の事ながらも相儲け置きたき事に候。非常の變、不意の急に差懸り候うても、囊中拂底にては差問ふるものに候。追追、有志の人の牢獄に繋がれ、又は飢渴に迫り候者も相助けたく、義士節婦の碑を建て、墓を築く事にも力を盡し、手をのばしたき事に候へども、同社中有餘りの金もあるまじき事に候へば、せめてこの方の

(二) 長州萩の城外松本村にありき。

至誠をのみだに貫きたき事に候。されば毎月寫本なりともして、僅かの儲致し置きたく、月末松下塾まで銘銘持寄り致すべく候。半年にもせよ、一年にもせよ、塵も積れば山となる理にて、きつと他日の用に相立つべく考へられ候。同社中、身の膏を搾り出して集むる事なれば、迂闊に費すべきにあらず。已むを得ざることあらば、同社中申合せの上にて取扱ひ申すべく候。

抑人を救ふ用に備ふるも、富貴長者の事ならば、如何様にも相計らふべけれど、我我にては、か

く迄にするは貧者の一燈とも申すべき事に候。至誠の貫かぬ理はよもあるまじきなり。これに依つてこの度の取立て候金を一燈錢とは名づ

くるなり。

おとれりなきを待たれ玉ふ候
望むをばあまの奉らふと云
なむむしき言定はすのを言
くむ世帯は其ま 与 札

久 阪 玄 瑞 筆 蹟

一、毎月寫本六十枚宛、村

塾まで必ず持寄り致し置き候事。

一、寫本料は先師の定むる所、眞字十行二十字五文、片假名同斷四文の事。

(三) 吉田松陰。(二四九) 〇一五九七

一、一日僅かに二枚宛の事なれば、さまで勉強のならぬ事はあるまじ、若しこの枚數不足ある時は代料を以て相償ひ、必ず持寄りこれあるべき事。

右の條件この度申合せ候處、これしきの事に骨を惜しみ候位にては、我我の至誠貫き候事も覺束なく候様相考へられ候。銘銘きつと怠らぬ様致したき事申すもおろかに候。以上。
(久阪玄瑞)

二二 吾輩は猫である

吾輩は猫である。名前はまだ無い。吾輩がこの家へ住みこんだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても跳ねつけられて、相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重されなかつたかは、今日に至る迄名前さへつけてくれないのでわかる。吾輩は仕方がないから、出來得るかぎり、吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝、主人が新聞を読む時は、必ず彼の膝の上に乗る。彼が晝寢をする時は、必ずその背中に乗る。これはあながち主人が好きといふ譯ではないが、別に構ひ手がなかつたか

ら、已むを得ぬのである。その後色色経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は縁側に寝る事とした。併し一番心持の好いのは、夜に入つて、ここのうちの子供の寢床へもぐり込んで、一緒に寝る事である。この子供といふのは五つと三つで、夜になると二人が一つ床へはひつて一間に寝る。余はいつでも、彼等の中間に己を容るべき餘地を見いだして、どうにかかうにか割込むのであるが、運悪く子供の一人が眼を醒すが最後、大變な事になる。子供は「殊に小さい方が質があるい。」猫が來た、猫が來た。」と言つて、

夜中でも何でも大きな聲で泣きだすのである。すると例の神経衰弱性の主人は必ず眼をさまして、次の部屋から飛びだしてくる。現に先達などは、物指で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して、彼等を觀察すればする程、彼等は我儘なものだと斷言せざるを得ないやうになつた。殊に吾輩が時時同衾する子供の如きに至つては言語道斷である。自分の勝手な時は、人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつついの中へ押込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも

手出しをしようものなら、家内總がかりでおひ廻して迫害を加へる。この間も一寸疊で爪を磨いたら、細君が非常に怒つて、それから容易に座敷に入れない。臺所の板の間で他が顫へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向ひの白君などは、逢ふ度毎に、人間程不人情な者はないと言つて居る。白君は先日玉のやうな猫の子を四疋産んだのである。所がその家の書生が、三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて、四疋ながら棄てて來たさうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても、我等猫

族が親子の愛を完くして、美しい家族的生活をするには、人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬと言つた。一一尤もの議論と思ふ。

又、隣の三毛君などは、人間が所有權といふことを解して居ないといつて、大いに憤慨して居る。元來我我同族間では、目刺の頭でも、鯨の臍でも、一番先に見付けた者がこれを食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手がこの規約を守らなければ、腕力に訴へて善い位のものだ。然るに彼等人間は毫もこの觀念がないと見えて、我等が見付けた御馳走は、必ず彼等

のため、掠奪せられるのである。彼等はその強を頼んで、正當に吾人が食ひ得べき物を奪つて澄して居る。白君は軍人の家に居り、三毛君は辯護士の主人を持つて居る。吾輩は學者の家に住んで居るだけ、こんな事に關すると兩君よりも寧ろ樂天である。唯その日その日がどうにかかうにか送られればよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮える事もあるまい。まあまあ氣を永く、猫の時節を待つがよからう。

(夏目漱石—吾輩は猫である)

二三 四季の月

春は景色ややととのふ梅の時節よりも、櫻の花盛りなる程、照りもせず曇りも果てぬ朧月夜にこそ、一刻千金の價はあれ。

大原や、蝶の出で舞ふおぼる月。

晝の熱さを洗ひ流したる夕立の空さりげなき月は、海邊にて見んに如くものあるべからず。金波萬里の光に對ひては、いつか夜の更けゆくをも忘るるなるべし。

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを、

(一) 春もやや景色ととのふ、月と梅。(松尾芭蕉)
 (二) 照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき。(新古今集、大江千里)
 (三) 内藤丈草の發句。
 (四) 庭の面は未だかわかぬに、夕立の空さりげなく澄める月かな。(新古今集、源頼政)
 (五) 古今集、清原深養父。

雲のいづこに月やどるらん。

露しげき千草の野邊、夜すがら鳴明す蟲の音を添へて、秋の月はあはれ最も深し。

古今集、讀人不知。

白雲〇に羽うちかはし飛ぶかりの、

かずさへ見ゆる秋の夜の月。

冬の月のさえ渡りたる夜は、鐘の音も一しほ身に
しみて、冬木立の影墨繪の如くあざやかに。

寒月〇や、石塔の影杉の影。

正岡子規の發句。

(國定高等小學讀本に據る)

二四 我が故郷

我が故郷は九州のほぼ真中で、海に遠い地方、幅一里、長さ三里といふ、もつさうの底見たやうな谷が我が搖籃である。どちらを向いても雜木山がぐるりと屏風を立て廻し、その上から、春は青くなり、冬は白くなる。遠山がちよいちよい顔を出して居る。最も高いのは東に一つ孤立して居る高鞍山で、だれが天邊に乗りすてたのか、さながら鞍を置いたやう。雨が降る前には、必ずこの山に雲がかかる。この山が見え出すと、どんなに降つて居ても、やがては霽れる。雲がかか

るのも、日が射すのも、まづこの山が第一で、いはば我が故郷の氣象臺だ。四方の山から滾滾と湧出づる清水は相集まつて、村人のいはゆる大川・小川の二流となり、十分に谷を潤して居る。谷は一面の田、その田を無理におしのけて、此處に村が一撮み、彼處に家が二三十。北の隅にあるのが妻籠つまごの里といつて、まづこの谷の都で、町といへば町、戸數は千にも足らない。

取出していふ程でもないが、今も忘れ難く思ふのは、水の清さと稻の美しさとである。たしか東京に積出して鮭米にするさうな。その稻葉のつやつやと青

* Ink.

んで、のびのびと立揃つた所は都人士に見せもした。實に見せたい、蛙の聲を踏分けて、一村總出の田植時、早乙女の白手拭がひらりひらりと風に靡いて、畦から畦に田植歌の流れる頃の賑やかさを。それから炎天の田の草取はわきで見てもつらいが、併し夕方、「暑い、堪らぬ」といふ下から、ごろごろ鳴出す、突然大氣が冷える、ふと見ると、黒雲がもう高鞍山を七分通り吞んで居る。それがインキ*の散るやうに、ずうつと満天に浸みひろがつて来る。稻妻がぴかり、夥しい雷鳴二つ三つ。冷たい風がさつと吹いて來ると、臆て大粒

の雨がぼつり。耳を掩うた太郎作がまだ半町と逃延びぬうち、に鳴る、光る、降る、吹く。世の終かと思ふ程の荒れやうと思へば、忽ちすうつと明るくなる。笠おつ取つて出て見る頃は、夕立は最早五六町逃延びて、隣村はさながら簾越しになつて居る。大空を眞二つに割つて東の方はまだ眞暗、雷様がごろごろ太鼓を敲いて居るが、西の方はあかあかと夕日がさして、高鞍山の天邊と思ふあたりから谷へかけて、すばらしい虹が立つて居る。嗚呼涼しい。御覽なさい、先程まで萎えしをれて居つた稲が、たつた一瞬の間に、眼も醒め

る程あをあをとなつて、一二寸も伸びたやうに、どこを見ても、ざわざわとさざめいては露を揺りこぼして居る。獨り泡だつ田の水はどくどく溢れて、小鮒や鱒がやたらに畔路にはねて居る。

蟲送も濟んで、初秋の風をよそよと稲葉に音づれる頃は、夜は露より明けて、朝日に匂ふ稲の花の美しさ。二百十日、二百二十日の厄日も事なく過ぎて、青疊敷いた谷間がいつしか金色に照つて、此處にもざわざわ、其處にもざくざく。收穫のさかりになれば、たれを訪ねても家には居ない。皆田に出て居る。時雨が降

出すと、夜晩くまで糶ずりの音が聞えて、高鞍山に雪が見える頃は、つい先月まで田にあつた稻が、最早綺麗な米俵になつて、倉や納屋に積まれて、農夫は新酒に舌鼓打つて豊年を祝ふのである。

それから水、嗚呼、あんな水が縦横に市中を流れて居たら、東京もどんなによからう。我が故郷では殆ど井戸の用なしといつてもよい位。四方の山から滾滾として絶えず湧出づる清水は、縦横に小さな流をなして、鮎はしる二つの川に落合ふ。何處に行つても潺湲淙淙の音が聞える。夏の月夜など、ちつと聞いて居

ると實に好い。京都は水がよいといふが、自分は京都よりもよいと思ふ。馬が飲む道傍の小溝の水も、女が洗濯する家の前の流も、乃至水車がかきまぜる田川の水も、實に氷と冷たく、玉と澄んで居る。今でも、夏になると自分は一入故郷をしのぶのである。

(徳富蘆花「思出の記」)

二五 リンカーンの少年時代 上

完全無缺の人物は、古往今來、決してありません。しかし完全に近い人物を求めたならば、^{*}アブラハムリ

* Abraham Lincoln.
(1809—1865)

ンカーンの如きは實にその一人でありませう。英雄豪傑は必ずしも得難くはありませんが、完全に近い人物は眞に稀有なものであります。

リンカーンは北米合衆國第十六代の大統領であります。智あり、勇あり、義あり、愛あり、その徳は萬世に輝き、その澤は四海に溢るる人であります。私は今この大人物の少年時代の話をして、聊か追慕の意を表したいと思ひます。

斯かる大人物も、其の生れは極めて賤しく、生れたところすら、唯ケンタッキー州中、當時ハルデインと

(一) Kentucky.

(二) Hardin.

(三) Nolin.

稱へた片田舎のノーリン河の邊といふだけで、今日は遺跡とても残つてゐません。彼の兩親は極めて貧しく、家と稱するほどの住居もなく、丸木の小屋に住んで居りました。この丸木小屋こそ、實に、千古の大人物アブラハムリンカーンが呱呱の聲を擧げた處であります。時は西曆一千八百九年二月十二日、春雪正にとけて梅花綻ぶる時節の事であります。

父は憐むべき日雇で、日日他人の田圃に勞役し、母は炊事裁縫一切の家事を勤むる外に、他家へ洗濯に雇はれたり、近傍のや林で薪を拾うたりして、その

日その日のかすかな煙を立てて居りました。リンカーンは七歳の時から、父に随つて森に行つては、小さい腕に小さい斧を揮つて、開墾の業を助け、畠へ出ては、鋤を執つて耕作の手助をもして、十年餘り寸毫の暇もなく、營營として労働を續けました。

斯かる貧苦の間にも、常に彼を教へ、彼を勵まして、他日大成すべき基を作つた人がありました。それは誰でもありません、彼の母親でありました。この母親は素性の賤しきに似ず、至つて賢明な婦人で、常に、人間の價値はその身の貧富貴賤によつて定まるもの



リンカーン

でなく、その精神の如何によるものであることを教へました。そして「御身を學校に入れて學問をさせたいは山山であるが、今の貧乏ではそれもかなはぬ。せめては母が覺えた一通りを教ふる程に、農事の暇に精出して、勉強せよ」と懇に言ひきかせて、第一に習字、次に讀方を教へ、朝は早く起しては習はせ、夜は疲勞を忍ばせては教へましたが、不幸にも、リンカーンが十歳の時、朝露に先だつて、脆くもあへなくなりました。彼は天を仰ぎ地

に俯して歎き悲しみましたが、今は致方もないので、父とともに泣く泣く野邊の送りを營みました。

父はもとより、日日の勞役に追はれて、その子を顧みる暇はありません。母亡き後のリンカーンは暗夜に燈火を失つた心地。せめて一年半年なりとも小學校に通ひたい。と切に父に訴へましたので、父も餘りの不憫さに、遂に之を許しました。リンカーンは天にも昇る心地で、日日九英里餘の路をも厭はず、一回の缺席もしないで、田舎の小學校に通ひましたが、哀にも赤貧の爲に、僅僅九ヶ月にして、復廢學せねばな

らぬ事になりました。嗚呼、この九ヶ月こそ、彼が前にも後にも、一生涯中に受けた學校教育の全體であります。

これより彼はまた、日日鋤を執つて田圃に働く身となりましたが、或は種を播き、或は草を刈る時にも、常に一二の書卷を携へてゐました。その書は綴字書、算術書、文法書の三種でありました。彼の性の伶俐なる、又その精神の不屈なる、耕作の暇暇に、露天の下で、教師もなくて、よくその意義を理解することが出来たのであります。斯くて朝には此等の書を携へて出

て、夕には之を携へて歸り、暇ある毎に怠らなかつた爲に、久しからずして、この三書を一章一句も残さず、悉く暗記するに至りました。

二六 リンカーンの少年時代 下

十三四歳の頃、その隣にかねてその名を聞いてその功業を敬慕せるジョージ・ワシントンの傳記を藏することを知り、讀みたいとは思ひながら、賤しい身分を恥ぢて、思をこがして居ましたが、一日、遂に思ひ切つてその借覽を請ひました。幸に其の人は快く

(一) George Washington.
(1712-1790)

(二) Page.

貸してくれました。リンカーンは鬼の首でも取つた心地で、雀躍して家にかへり、丁寧に戸棚の中に入れて置きましたが、不幸にもその夜大風雨があつて、彼が爲に一大事が起りました。彼が驚き覺めて、借りた本のことを思ひ出し、濡しては一大事と、急ぎ取出して見た時は、もう後の祭。壁の隙間から吹込んだ雨に濡れて、さんざんになつて居ますので、大聲あげて泣きました。小兒心に心配して、その夜は終夜眠られませんが、翌朝、兎や角と案じましたが、正直に次第を述べ、罪を謝する外はないと決心して、濡れ破れてペー

ジもわからぬ書を持つて隣家に行き、泣いてわびをし、其のかほりに、二日でも三日でも勞役をさせて下さい。」と頼みましたので、貸主もその心を察して、別段に之を尤めず、その意に任せました。そこで彼はウォシントン傳を携へて家に歸り、濡れたページを丁寧に乾かして、晝夜の別なく耽讀しました。以來、讀過數十遍、この大人物の品性に感化せられて、遂にはこれを體得するに至りました。

又彼が一農家の僕となつて居た頃、或日、一人の旅客がその家に宿つたことがあります。その旅客が深

更に廁に行つて、ふと見ると、庭の木立を洩れて燈火の光がさしてゐます。不思議なことと、竊かに行つて見れば、思ひがけなくも、裏の粗末な長家に、一人の少年が一心不亂に書見をして居ります。旅客はこの意外の光景にひどく驚いたが、その夜はそのままわが室にかへり、翌朝、家の主人にこの事を聞きました所が、主人も彼は感心な少年で、晝間は畑に出て、寸暇を得れば書を讀み、夜も夜業が終れば更くるまで勉強し、わからぬ事があれば人に質し、學問を此の上なき楽しみとしてゐる。しかも温順で、謙遜で、正直によく

働いて、才智もあれば、情愛もある、實に末頼もしい少年である。』と答へたといふ事であります。この少年こそ、言ふまでもなくリンカーン其の人でありました。諸君は、我が國近世の偉人、二宮尊徳の少年時代の勉學を知つて居られませう。貧家に育つても、よく勉強の功を積んで大成せる、東西の二大人物の少年時代は、實に私共の模範とすべきものであります。艱難汝を玉にす。リンカーンが他日大統領となり、世界の大人物として萬人に仰がるに至つたのも、實に此の少年時代に、貧窮の經驗から得た教訓の賜である

と思はれます。(アブラハム・リンコンに據る)

二七 須磨の浦

攝津の海岸西に盡くる處を須磨の浦といふ。畿内と山陽道との咽喉にして、古須磨の關のありし地なり。此の地、畿内の偏隅なるを以て、貴人の謹慎屏居の地たりきと見ゆ。相傳ふ、在原の行平卿勅勘を蒙りて久しく此の土に住せしとぞ。其の後、壽永の亂に、源平二家大いに此處に戦へり。されば須磨は僻地なるにも係はらず、關の址を以て名高く、貴人の舊蹟を以て

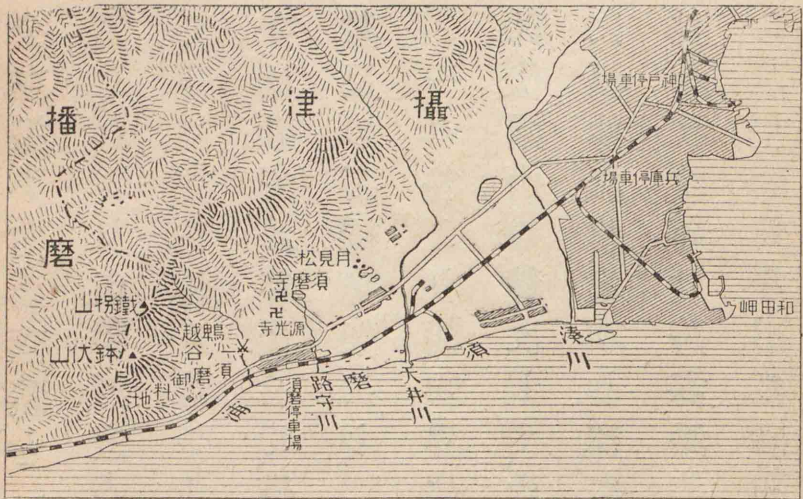
(一) 平城天皇の皇子
阿保親王の第二子。
(二) 壽永三年(八四四)
二月の一の谷の
戦。

名高し。しかのみならず風光清絶にして、月色殊に佳きを以て、月の名所として古より天下に聞えたり。兵庫より西に行くこと一里餘にして天井川あり。これより西の方數十町、攝播の界に至るまでは須磨村の地なり。

天井川より數町にして、路傍に用水池あり。池を隔てたる丘上の老松は、行平朝臣の月見の松と名づけたり。更に行くこと數町にして須磨寺あり。此處に平敦盛の首塚といふがあり。又敦盛の遺物と稱する寶物數多を藏して、參詣人に觀す。須磨寺の隣なる源光

經盛の末子。

源氏物語の主人公。



寺は俗に光源氏の舊蹟なりといへり。此處に碑あり、芭蕉の句を刻めり。

見渡せば、眺むれば、

見れば、須磨の秋。

源光寺を過ぐれば、古の關屋の址にして、石の榜示あり。前の小流を路守川といふ。此の邊、源平の戰に關する古蹟と稱するもの頗る多し。又菅

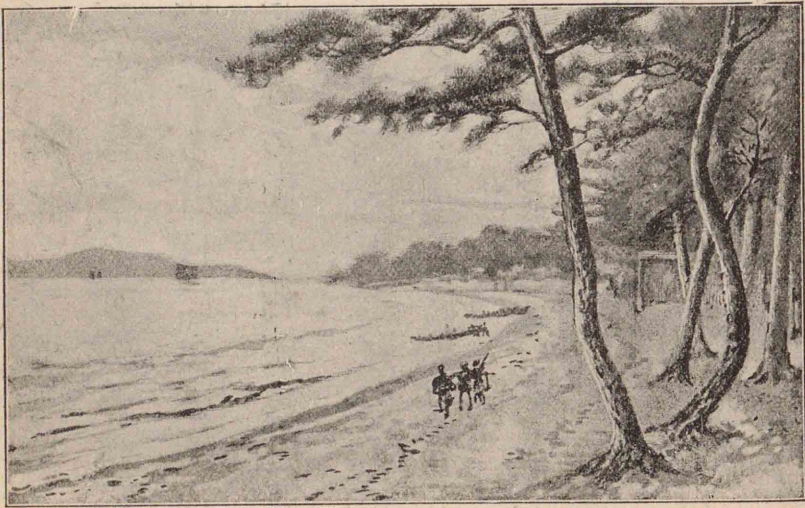
公左遷下向の舊蹟といふがあり。

これより山陽鐵道の須磨停車場を過ぎ、數町にして一の谷を渡る。昔、平氏が第一の要害と頼みけんも、今は砂崩れ、谷淺せて、僅かに一條の溝を残し、此處に數尺の石橋を架せり。

一の谷より西、國界に至るまで十餘町の間は、鐵拐鉢伏兩山の麓にして、山頂より路傍に至るまで、一面に松林相連なれり。即ち須磨御料地なり。御料地より眺むれば、前は蒼海渺茫として遙かに紀泉の山を繞らし、左は天井川の砂洲斗出して、粉壁樹林の中に點

* Panorama.

じ、右は淡路島呼ばば應へんとす。平遠明媚喜ぶべきに、後は御料林の老松山上に連なり、龍蟠り、虎踞る、眞にこれパノラマに入るが如し。況や明月中天にかかり、海波銀を磨する時においてをや。須磨の須磨たるところは、ただ此の十數町の間、に在りといふべし。



須磨の浦

須磨は風景の佳なるのみならず、醫家の説によれば、空氣の清潔にして、養生に宜しきこと亦天下第一なり。故に近來、此處に轉地保養する者日に多きを加ふ。これを以て旅店、別莊、青松、白砂の間に相望み、凡そ地の買ふべく、借るべきもの殆ど餘す處なく、十年前の漁村變じて雜沓の街とならんとせり。獨り一帶の御料林は、固より金力の侵すべきにあらず。民これを得ざるが如くにして、永くこれを失ふことなし。富人も往き、貧生も遊ぶ。風景依稀として古の如くなるは、豈にこれ、我が帝室の餘光にあらずや。(新保一村)

二八 須磨の嵐

後の山のちのの山おろしに鳴りわたる松の木かげより、萌黄もへい匂の鎧よろいを着、重籐おもたけの弓をたばさみて、駈出かきだでたる一人の若武者あり。沖なる船をめぐがけて、馬を海へさつと打入れて、一町ばかり泳がせたるをりしも、後の方より、一人の老武者大音あげて、あつばれ好き大將軍と見奉る。敵に後を見せたまふは卑怯へいけつに候。返させたまへ、返させたまへ。日本一の剛ごうの者熊谷次郎直實くまがや じらう ちかひさとは我が事にて候と、扇を上げてうち招く。彼の若武

*源頼朝の臣、後出家して蓮生坊といふ。

者は呼ばれて馬の頭を立直し、引返して汀にうち上らんとするところに、彼の老武者駈寄せてむずと組む。組みたるままにて、兩馬の間にどつと落ちたり。老武者の力やまさりけん、かの若武者を取つて抑へ、首をかかんとて、兜を後におしあふのけて見れば、年の頃十六七の美少年なり。老武者は驚きて、「如何なる御方ぞ、名乗り給へ、助けまゐらせん。」と言へば、若武者は「名乗らずとも、首を取つて人に問へ。見知らん者もあるべし。一旦敵に組みしかれ、何の面目ありて長らへん。早く首をうち取れ。」と答ふ。わが子も同じ年頃なり。

(二) 清盛の父。

あはれなる人かな。如何にもして助けばやと、老武者四邊を顧みれば、後の方に、おびただしき蹄の音して、はや身方の兵五十騎ばかり近づきたり。今はこれまでなり、ゆるさせ給へ。」と、涙を抑へて首をかき斬りぬ。さて首を包まんとて、鎧直垂を解けば、錦の袋に入れたる笛を腰にさしたり。この笛は、平忠盛が鳥羽院より賜はりし、世に青葉の笛と呼ぶものなり。さればこの若武者こそ、經盛卿の末子、當年十七歳と聞きつる敦盛の君なるべけれ。今朝、わが城の前にてほのかに聞きしは、この笛の音なりけん。それを吹きしはこの

(三) 清盛の弟。

*
壽永三年。

君なりしか。いとほしきかな、花の姿つれなきあらしの前に散りぬと、老武者はずるに人の世のはかなさを覺えて、涙をはらはらと鎧の袖にそそぎぬ。時は二月の初つ方なり。磯の松風すこし吹きよわりて、汀に寄する波の音、さながら世の中のあはれを語るかと疑はる。(尾上柴舟)

二九 大海原

大いなるかな、大海原。

朝に、夕に、どうどうと

動き、轟き、夜もすがら

大浪・小浪寄せ返る。

いづこに打たぬ浪を見ん。

いつ浪の音を聞かざらん。

大いなるかな、大海原。

世界の山山ことごとく

崩すとも、海は埋るまじ。

世界の川川絶間なく

注げども、海はとこしへに、

不増・不減の瑠璃の色。

長閑けき様は海にあり。

風なぎはてし春の沖に、

朧にうつる月見れば、

あらぶる心もなぎぬべし。

松島かげの朝ぼらけ、

蓬萊山もよそならず。

淒じさはた海にあり。

春秋二季の大あれに、

はやて起つて浪立てば、

甲鐵艦も木の葉と漂ひ、

大高潮のさかまけば、

村村流れて跡もなし。

山は崩れ、川は涸れ、

國興亡し、人變り、

陸には古今の別あれど、

海原のみは、開闢の

神代のすがたそのままに、

動き、轟き、寄せかへる。(坪内逍遙)

三〇 海に歸れ

古來日本人は大和民族と稱せられる。大和の語源については多くの説もあるが、多分は「山」と云ふ語から來た名稱であらう。言を換へれば、山の多い國であると云ふことから名附けたのであらう。吾吾の祖先は、恐らく、大海原の怒濤を凌ぎ來れる者であらうと思ふ。永い永い航海の後に、山多き群島に上陸した時は、どんなに安心し、満足したことであらう。海に飽いて飽いて飽き果てた擧句、清清とした山を見、やがては、海に遠ざかつて山の麓に落着くことが出來た。海上の不安に比すれば、陸上の生活は如何に心安く覺

えたことであらう。吾吾の祖先が大和民族と名乗つたのは、陸上生活に初めてほつと一息ついた瞬間の感謝の記念ではなからうか。僕はさう思ふのである。爾來日本人は山を愛する國民とはなつた。太平洋の怒濤を歌つた歌人はないけれども、富士の高嶺や、筑波山や、其の他多くの山が絶えず歌の題目となつた。斯くて大和民族が山の感化を受けたことは非常なものである。民族としての獨立心も相應に發達し、遂には島國根性といはれるまでに發達し來つたのである。

僕は子供の時、海を恐れて、何時も船に暈つた。六年前に敦賀から浦鹽へ航海した時は、三十幾時間殆ど絶食のすがたであつたが、其の後、英國海峽は無事に渡ることが出来た。それから同海峽は四回ほど往復したが、更に暈ふことはなかつた。また昨年歸國の際、大西洋を横斷する時、折折ひどい波濤に遭つたが、只一度食事を缺いたばかりであつた。そこで私は、海洋の生活に慣れると云ふことが大切であると悟つた。慣れさへすれば海は左程恐ろしいものではない。更に進んで海を愛するやうになれば、また格別である。

ある。

此の世に於て、海の如く自由で且つ永遠の面影を表してゐるものはない。大洋を航海すれば神祕の感に打たれる。甲板の上には随分俗物も出沒するが、併し脆い船底の下には、自然の莊嚴が權威を示して居る。朝日・夕日の崇高なること、星夜の空の、何處となく恐ろしげなること、殊に風ぎわたれる曙の波の美しさは、之を見た人でなければ想像することが出来ない程である。

高山幽谷を跋渉して、天の靈氣に浴することも必

要ではあらうが、併し現在及び將來の日本民族は、更に奮つて海に赴く氣分や性質や習慣をも養はねばならぬ。數千年の祖先の時代に立歸つて、怒濤の子とならねばならぬ。日本民族の將來に於て發展す可きは、西か北か將た東か南かは未だ豫測することは出來ないが、海を越えねば何れの方面にも發展の餘地なし、といふ一事は明かである。日本民族は男も女も海を好み、海に強くなるやうな訓練を経ねばならぬ。

(内ヶ崎作三郎)

三一 國 引

伊弉諾尊伊弉册尊がお生みになつた日本は、初程は小さうて足りない處が多かつたが、子孫の神神がだんだんに修理を加へ給ひて、今の様を立派な國となつたのである。

出雲の國は取分け小さかつた。極幅が狭くて帶の様であつた。素戔鳴尊の四世の孫、臣角命（みかどのみこと）といふ方が、「いかにも、これでは狭過ぎる。ちと縫足さなければならぬ。」と思し召し立たれた。

そこで海岸の巖の上に立つて、何處かに「國の餘り」

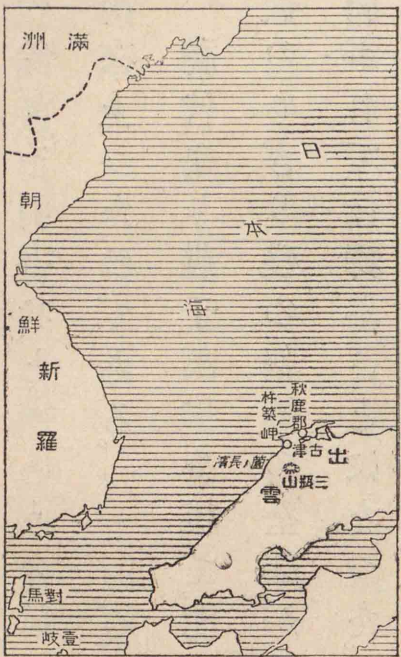
は無いかと、遙かに西の方を御覽になると、漫漫たる大海を隔てた彼方に、新羅しんらの國が見える。

「おお、あるある、新羅の岬に『國の餘り』がある。あれを引寄せて此の國に縫合せよう。」

と、臣角命は神通力をあらはして、其の新羅の國の出鼻をずばりと切分けて、さて三撚みつよりの大綱を打掛けて、其の國の片きれに結びつけ、えいやえいやと手ぐり寄せ、そろりそろりと引寄せて、「國來い國來い、此處まで來い」と、とうとう引附けて縫ひあはされたのが、古津ふるつから杵築の岬の邊である。此の時國引の綱を繋ぎ止め

た杵が即ち今の三瓶山といふ山。又其の綱は菌の長濱になつて居るのである。

まだこれでも出雲の國が小さいので、今度は北の



方に「國の餘り」は無いかと御覽になると、滿洲の方に大分廣い處が見えた。早速其處を切分けて、

又もや三撚の綱打掛けて、國來い、國來い、此處まで來い」と、引寄せてつぎ合されたのが、今の秋鹿郡あたり

になつた。

「今少し足さう。」と言つて、東北の方を探して、其の「國の餘り」を引寄せ、とうとう今日の出雲國がすつかり出來上つたのである。

神代より幾千萬年を経て、明治四十三年になつて、彼のちぎり殘の朝鮮の全部が、遂に悉く我が日本に引かれて仕舞ふことになつた。(古事記斷)

三二 膽力の養成

男子と生れた以上は、死生の境に出入しても、從容

自若として、更に動じないだけの膽力は持ちたいものである。膽力のあるものは、白刃眼前に閃き、危岩頭上に崩れかかつて、悠然としてすましてゐるが、膽力のないものは、天井から鼠の糞が落ちて、膽を冷し、色を失ふではないか。

膽力はその人の天稟にもよるが、また決して修養せられぬものではない。上杉謙信が十四五歳の時、大敵に追はれて、門番所の板敷の下に潛伏しながら眠つて居たとか、徳川光圀が六歳の時、暗夜に刑場に往つて、死人の首を取つて來たとか、ネルソンが幼時か

(二)
名は輝虎。(三)五
一三三)

(三)
水戸侯。(三)六
一三六)

ら、恐怖の何物たるかを知らなかつたとかいふのは、皆、天稟と見るべきものであるが、修養で剛膽の人となつた例も、亦決して少なくない。

昔、武田^{*}信玄の部下に、岩間大藏左衛門といふ名代の臆病者があつた。信玄はどうかして矯正しようと考えへて、或日の戦に、彼を掩護物のない處に縛りつけ、敵に向つて坐らせて置いた。矢玉は雨のやりに飛んで来る。砲聲は雷のやりに轟く。彼はその怖ろしさに、殆ど死人のやうになつてしまつた。しかし幸にも一つも矢玉が中らなかつた。そこで彼は翻然として、運

*名は晴信。(三六
一三三)

さへあれば矢玉も中らない、死は決して畏るべきものではないと悟つて、それからは、戦争毎に勇み戦つて、遂に武名を揚げたといふことである。

大藏左衛門が戦を恐れたのは、彈丸雨飛の危険を過大視したからである。危険・災害の身に迫つた時、直にその結果を過大に豫想して、恐懼狼狽するのは、神經質な人ほど有りがちの事である。ところが平素修養あり、經驗あるものは、決して恐懼狼狽することはない。消防夫が炎炎と燃えあがる猛火の中に、泰然として立つのも、水夫が狂瀾・怒濤の間に、自由に働くの

も、皆鍛錬と經驗とに依つて得た自信と覺悟とがあるからである。だから成るべく多くの鍛錬と經驗とを積むことは、膽力養成の有力な方法である。

次には、あきらめるといふことが必要である。危険・災害等の來る場合に、なるべく安全に避けようとす
 るのは、人の眞情には相違ないが、それが爲に却て怯懦に陥る事があるものである。最もわるい結果を身に引受けても是非に及ばぬと覺悟すると、膽は自然にすわるものである。例へば眞劍勝負をする場合に、まづ身を捨てる覺悟を極め、自分の骨を切らせて、敵

の命を取るといふ風に、死身になつた上で、手段と伎倆とを盡す方が、命を惜しむものよりも自由がきくから、自然數倍の働をすることが出来る。

勝海舟は膽力に富んだ人で、白刃を踏みながら、談笑の間に天下の大事を決した英傑であるが、自らその膽力を禪學と劍術とに依つて養成したものと信じて、左の如く語つて居る。

「自分は殆ど四箇年の間、禪學と劍術とを修業したが、徳川幕府瓦解の時分、萬死の境に出入して、終に一命を全うしたのは、全くこの二つの功であつ

た。度度、刺客やなんかに脅されたが、何時も手取に
 した。この勇氣と膽力とは、畢竟この二つに養はれ
 たのだ。危険に際會して逃げられぬ場合には、まづ
 身命を捨ててかかつた。さうして不思議にも死な
 なかつた。ここに精神上の一大作用が存するのだ。
 急に勝たうとすると、忽ち頭熱し、胸跳り、措置顛倒
 し、進退度を失するやうな患が生ずる。又遁げて防
 禦の位置に立たうとすると、忽ち畏縮の氣が生じ
 て、相手に乗ぜられる。大小の事、皆この規則に支配
 せられるのだ。自分はこれら精神上の作用を悟つ

て、何時もまづ勝敗の念を度外に措いて、虚心坦懷
 で事變に處した。それで小にしては刺客、亂暴人の
 厄を免れ、大にしては瓦解前後の難局に處して、綽
 綽餘裕あることが出來た。

と。蓋し理窟の上から膽力を養成する事は容易でな
 いが、實地の修行に於て膽力の鍊磨せられる事、殆ど
 人の想像以上である。(嘉納治五郎「青年修養訓」)

三三 スミス氏の飛行

空界の覇者、^{*}アトスミス氏は、鳥すらも翼を收め

* Art Smith.
 米國人。時
 年二十一。

て飛ばざる烈風中を飛びぬ。

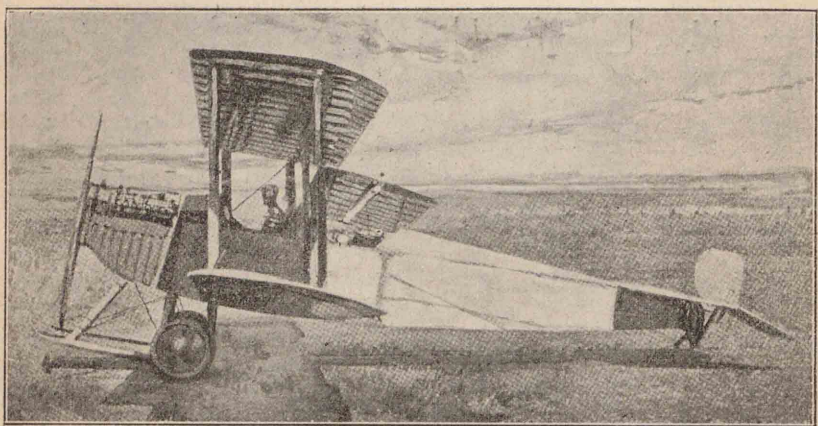
この日、朝來の烈風は、午後に至つて益々猛威を加へ、青山原頭は紅塵濛濛として天地を罩めたり。風を冒して詰めかけたる二萬餘の觀衆も、さすがに今日の飛行を氣遣ひぬ。來場の長岡中將は、切にその飛行斷念を勸告したれども、胸中大いに成算ある氏は、微笑を以てその好意を謝し、直に飛行準備に取りかかりぬ。格納庫内にありたる愛乗のカーチス複葉機は、風のために全く砂塵におほはれ居たれば、まづ發動機を洗滌して、精密なる機體の點檢をなしたる後、技師

名は外史。陸軍中將。

(二) Curtiss

(三) Khaki.

(四) Propeller.



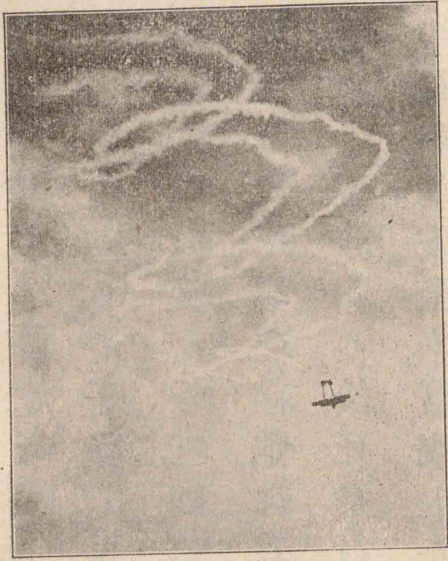
機 行 飛 ス チ - カ

を督して機を場の北端にはこび、發動機の調整完全なりと見るや、氏は、紺地背廣服の上にカーキ色の作業服を着し、飛行眼鏡をかけ、凜乎たる決心を面上に見して、早くも機上の人となりぬ。發動機は爆音をたて、プロペラーは廻轉せり。吠ゆるが如き烈風は砂塵を捲いて殺到し、機を粉

碎し去らんとする時、機は轟轟たる叫とともに飛揚せり。時に三時二十分、場の内外の觀衆は、驚異の喝采を超越して、讚美の沈黙を守る。

西南三十二米突の烈風は眞向より機首を襲ひたるため、百米突の高度に至るまでは、砂塵、機影を没しけるが、やがて砂塵の圈内を脱したる機は、極度の上舵を引きつつ上昇しゆく。觀衆の群は蘇りたる心地して、はじめて雷の如き歡聲をあげぬ。機は猛鷹に追はれたる飛燕の如く、翩翻として烈風に煽られつつ、一度は風を衝いて南し、一度は風に流されて北し、場

の上空を旋回すること四回、遂に八百米突の上空を極む。飛ぶだけで十分だ。宙返はあまりに冒險だ」と語り合ひて、觀衆は何れも、



ス氏宙返飛行

大破滅の瞬間の如き危惧の念に満されつつ、去來する機影の一舉一動をも見逃さじとす。機は漸次に風向に従つて、六百米突の空に下降するよと覺えたる一瞬時、巧なる極度の上舵に、獨樂をまはすが如く宙を返りぬ。颼颼

たる烈風も、世界的鳥人ス氏の妙技を妨ぐるに由なく、機は又もや見事なる逆轉を續くること三回、忽然として機首を下にし、得意の螺旋狀降下に移つて、四百米突の空まで下降し、再び機首を水平に復したりと見る間に、又もや二回の逆轉をおこなひ、再び墜落的下降にて場の南隅に着陸せり。時に三時三十五分。この十五分間の決死飛行に、世界的妙技を揮ひ、飛行の絶對的安全を實現したる機上の氏は、滿面、砂塵に塗れて、恰も百獸を屠りて凱旋せる獅子王の如し。空前の妙技に熱狂したる觀衆は、われがちにス氏

(二) 名は愛橋、理學博士。

(三) 明治三十三年の北清事變、拳匪一名義和團が外國人を排斥せんとして起したる亂。

を取圍めり。中にも長岡中將、田中館博士は、我が飛行界の大恩人」と叫びながら、感極まつて、ほろほろと嬉し涙をこぼしぬ。(金子元臣の文による)

三四 冒險小僮

支那に名高き拳匪の亂起りて、北京の市中戰場の如くなりし時の事なり。ある商家の小僮イギリス宣教師の學校に通學しをりしたため、拳匪に憎まれ、奉公先は逐出され、一時は命までも取られんとせしを、幸に舊師の宣教師に救はれて、イギリス公使館に使は

るる事となりぬ。そのうちに拳匪は公使館までも押寄せ來り、激しく包圍攻撃をはじめけり。

天津にはイギリスの軍隊もをれば、この危急を知らせやりて、應援して貫ふより外に法なしと、評議一決し、夜に乗じて密使を送り出ししこと既に兩三度にも及びけるが、皆見あらはされ、途中にて殺されけり。その後は怖ろしがりて、如何に賞を懸くるとも、誰一人「我往くべし」と言ひいつる者なし。この上は何とせんと、人人思案に暮れはてける時、かの小僮恩返しの心にや、けなげにも「私參るべし」と言ひいでけり。

かくて七月四日のひきあけがた、小僮は胴のまはりを大繩にてゆはへ、それに吊されて、四十丈の市壁の外へおろされたり。さして行くべき道は少なくとも八十哩。見あらはされなば命を取らること必定なり。見るも汚き襤褸を着て、身を物貫にやつし、目に見えぬほどの細字にて認めたる密書を小さく疊みて桐油紙に包み、缺けたる鉢に入れ、上へは粥を盛りたれば、ここに密書ありとは、如何にしても氣づくまじく見えたりしが、運わるくも、市壁よりおり立つはづみに、石角に打附け、無慙や鉢は二つとなりぬ。

今更四十丈の上なる人を呼びたてなば、近きあたりに張番せる拳匪の耳にもいるべし。さればとてこの儘にては忽ち密書を見つけられん。いかにすべきかと惑ひけるが、手ばやく密書を鉢より出し、桐油紙を取去り、破れたる襪褌の袖口を少しばかり裂取りて、そのきれにて、密書の中に、ぐるぐると指を巻き、怪我などせし如くに見せかけて、胸を据ゑて進みゆきぬ。行くこと未だ五六間にもならぬに、果して拳匪に呼止められ、嚴しき取調を受けけれども、幸に何の故障もなく放たれたり。ここに少しく隙を得て、更に襪

褌着物の裾を解かし、その縁へ密書をば縫入れけり。かくて行手ながき旅の間、情ある支那婦人などの恵を受けて、からうじて飢渴を凌ぎ、次第に天津の方へ進み、既に四十哩程も旅行して、ある農家に泊りけるが、その家の主は甚だ自分勝手なる男にて、目下小僮なくて困りをる所なれば、食はせてやる代り、とどまりて奉公せよ。といひけり。強ひて一夜泊めて貰ひし恩もあり、否といはば、疑はるる虞もあり、是非なく一應は承諾せしかど、かくてあるべきにあらねば、八日ばかりして病氣といつはり、今にも死ぬるやうに

呻吟うめき苦しみて見せけり。慳貪けんこんなる主人はこれを見て、死なれては厄介やくがいなりとて、薄情はくじやうにも逐出しやくしゅつしければ、小僮せうどうは心こころひそかに喜びながらも、わざと苦しげによろめき歩み、その家より遠とほざかるや否いなや、銃丸じゆうがんなどのやうに走りだし、それよりまた數十哩しゆじゆり歩みて、やうやうに天津てんしんにぞ着つきける。

然るにここも今は戦地せんちの如く、あちこち、各國こくごくの兵營へいじやうづくめにて、何れがイギリスのとも見分けかねしを、根氣ねきよく尋ね廻りて、七月二十二日にやうやうイギリスの軍隊ぐんたいに近づき、密書みつしよを領事りやうじに渡しけり。

かくて領事りやうじより、やがて援兵えんぺいを送るべし、安心あんしんせよ。との公使館こうしきんへの返書へんしよを受取り、すぐに又もと來し方へと引返しぬ。歸る途途ととも拳匪けんひのをらぬ所はなし。されど運うんよくも見咎とがめられずして通りぬけ、同じ月の二十八日に、恙やまなく北京ぺきんに歸り着きしが、例の四十丈しじゆじやうの市壁しへき屏風びやうぶの如く、攀登はんとうるべき道みちもなし、夜明よあけけては危あやければ、壁かべの下したなる狭せまき水門みづかど口ぐちより潛ひそり入りて、公使館こうしきんに辿り着き、首尾しゆびよく返書へんしよを渡しけり。人人生にんじんき返りたる思おもをなし、喜び勇ゆうみ、小僮せうどうを歡待くわんたいする事限ことかぎなし。されども小僮せうどうは誇こほり驕あはれる色いろなく、その後も普通ふつうの

小使同様に奔走して、いと忠實に事へたり。

八月十四日に及びて、天津より援兵來り、拳匪は悉く追はれ、公使館は全く安全となりしかば、人人更に厚く小僮の功勞を賞しけり。

かかる名も傳はらぬ外國の少年にすら、この氣概あり。まして我がいにしへの勇者にはこのたぐひの事珍しからず。彼の奥平信昌の家臣鳥居強右衛門の話などを思ひあはせ見るべし。(坪内逍遙)

修訂新撰國語讀本卷一終

德川家康の臣、
天正三年(三三)武田
長篠城にて武田
勝頼と戦ふ。
天正三年長篠城
にあり、甲斐の
園を受けしとき、
私かに遁れ出て、
救を德川家康に
求めて遂に主君
を救へり。

大正三年十二月四日 改訂再版印刷
大正六年十月二十三日 修訂印刷
大正七年一月十日 修訂再版印刷
大正七年一月十四日 修訂再版發行

訂新撰國語讀本(全十册)
卷一、二 各金參拾六錢
卷三、四 各金參拾壹錢
卷五より各金貳拾九錢
卷十まで
大正七年一月十日 改訂再版印刷
大正七年一月十四日 修訂再版發行
大正六年十月二十三日 修訂印刷
大正三年十二月四日 改訂再版印刷
定價
卷一、二 各金參拾六錢
卷三、四 各金參拾壹錢
卷五より各金貳拾九錢
卷十まで
年度
大正七年一月十日 改訂再版印刷
大正七年一月十四日 修訂再版發行
大正六年十月二十三日 修訂印刷
大正三年十二月四日 改訂再版印刷

著者 佐々政一

發行者 株式會社 明治書院

取締役社長 三樹一平

印刷者 島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地

東京市小石川區大塚窪町八番地

發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話本局二三九八番



